Black Book for Busters

薙月　桜華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｂｌａｃｋ　Ｂｏｏｋ　ｆｏｒ　Ｂｕｓｔｅｒｓ

【Ｎコード】

Ｎ８９３８Ｈ

【作者名】

薙月　桜華

【あらすじ】

ある日、鈴花は学校にある「開かずの間」で黒い本を拾った。しかし、本は消えてしまう。次の日、教室にてみんなが居る中で昨日見た本を再び見つける。しかし、今度はみんなが消えてしまう。戸惑う鈴花、突きつけられた現実、この世界を脅かす脅威。何時も見る世界と瓜二つの世界で、鈴花は黒い本、本の番人ハルと共にこの世界に侵入した敵に立ち向かう。それが、大切なものを破壊する行為だとしても。

第一話　開かずの間

第一話　開かずの間

荒谷鈴花は学校に向かって走っていた。家を出た時点で本鈴まで十分。家から学校まで歩いて約十分。歩いても間に合うが、それでは遅刻する可能性がある。走ると汗を掻いてしまうが、この際少しぐらいは仕方ないと思う事にした。

鈴花が校門を走り抜ける頃には予鈴が鳴る。彼女が昇降口にて上履きに履き替えるも、周りに居る生徒は少ない。

鈴花は階段を駆け上がり教室へと入った。教室に入るとクラスメイトのほとんどが着席しており、全員が彼女を見た。彼女は彼らの視線に恐怖を覚えて立ち止まるが、すぐに動き出し自分の席に着いた。彼女は噴出す汗をハンカチで拭う。

その直後、本鈴が鳴り担任の先生が来た。男の先生でかっこいいと思える先生である。他のクラスの女子からも人気があるらしい。男性教師と女子生徒の関係。その言葉からは危ないことしか思い浮かばない。

「ホームルーム始めるぞ。」

先生は出席簿を取り出し、出席を確認する。とは言っても先生が持つ出席簿はＡ４サイズの薄型タッチパネルディスプレイである。各生徒の学生証に内蔵されたＩＣチップに反応して本人が居るか確認するものだ。生徒が学生証を忘れた時は先生が本人を確認した上で画面を操作して出席をつける。入学してからずっと使っているものの未だどんな技術が使われているのかわからない。ただ、紙媒体の出席簿のように一々先生が出席を取る必要が無い点で楽だろう。

「それじゃあ。今日も一日頑張ろうな。」

先生は必要事項を伝え終わると教室を出て行った。次の授業は担任の先生の授業だ。だったら一緒に教科書類を持ってくればいちい

ち戻らなくて済むのにと思う。この少ない時間で何をするというのだろうか。
「ねえ、鈴花。おかしいと思わない。」
鈴花は斜め後ろから声が聞こえたためその方向を見る。すると、友達の小林京子が机に顔を付けてこちらを見ていた。彼女は見るからにお疲れのようであまり見たくない顔をしている。鈴花は笑うにも笑えず顔が引きつった状態になる。
「な、何が。」
鈴花はその光景に堪えながら京子に聞いた。
京子は鈴花の発言を聞き終えるとゆっくりと起き上がる。そして、彼女は机の上にあるノートを表紙が見えるように鈴花に見せた。
「何がって。出席簿が電子化しているのに、何で私らは未だ紙媒体のノートを使ってるわけ。」
鈴花は少々お怒りの京子に細かく何度か頷く。ここでさらっとかわせば良くないことが起きる。彼女は自分の鉛筆を一本持って京子に見せた。
「書かなきゃ覚えないって昔から言うじゃない。先生だってチョークで黒板に文字を書いているんだし、私たちだってノートに自分の手で文字を書いたほうが良いと思うけどね。」
鈴花の言葉に京子は左手にあごをのせて黒板を見る。京子の表情から彼女の言葉に納得していないように思えた。
「そうね。先生がプロジェクタで全部の授業を行うようになったら、その時は私もノートＰＣを使いたいわ。」
そこで、京子は目だけを鈴花に向けて続けた。
「あればだけどね。」
京子は小さく笑うとあごから手を離して前を向いた。鈴花も同様に前を向く。
もうすぐ、一時限目が始まる。

授業終了のチャイムが鳴り始める。先生はチョークを置き生徒に次回の授業についての説明をして教室を出て行った。先生が出て行くとすぐに教室内が騒がしくなる。

「ああ、終わった。」

鈴花は安堵の表情とともに机に顔を付けて目を瞑る。この後に授業は無い。つまり、今日はこれで帰ることが出来るのだ。周りの音を聴けばある者は友達と共に部活動へ、またある者は友達と楽しく喋っている。

その時、肩を軽く叩く感触があった。鈴花は目を擦りながらゆっくりと起き上がる。

「何。」

鈴花の目の前には京子が居た。しかし、彼女は目を開けたばかりのためか少し視界がぼやけている。

「早く準備しないと先に帰るわよ。」

京子は教科書の入った鞄を机の上に置く。鞄は重量があるのか微かに鈍い音がした。

鈴花は理解したことを伝えるために何度か頷くと、自分の鞄に教科書や筆記用具一式を入れた。彼女は立ち上がると鞄を左手に持つ。

「さてと、帰りましょうか。」

京子は荷物を持って先に歩き出した。鈴花には彼女が朝よりも元気があるように見えた。

クラスメイトのほとんどは教室から出ており、室内に残っているのは鈴花たちを含めて数人である。彼女たちは教室を出ると階段へ向かって歩き出した。

「今日は早く宿題終わらせて遊ぶぞ。」

鈴花は朝よりも元気の良い京子を横目に歩く。そして、視線を前に戻したとき、何時もと違う光景に立ち止まった。

階段奥にある部屋。その部屋には常に鍵がかけられている。開いているところを見たことが無いため、生徒たちの中で「開かずの間」と呼ばれている部屋だ。先生たちに聞いても中には古い書物が保管

されていると説明されるだけだ。その書物を読みたいと言っても許可してくれない。あの部屋の中に何か見られては困るものがあるのでは無いか。生徒たちの間でそんな噂が流れたこともある。
しかし、今日は鍵前が無く、木製の引き戸が少し開いていた。
「あれ、開かずの間に鍵がかかっていない。誰かが開けたのかな。」
鈴花は吸い寄せられるようにその部屋に向かって歩き出した。京子は言葉では鈴花を止めようとしているものの彼女に付いてきた。
鈴花は戸に手をかけて力を加える。木と木が擦れ合う音が聞こえてきた。この学校で唯一の木製引き戸。普段扱わないためか戸を引いても中々開かない。ようやく首が入るぐらいの幅になると鈴花は首だけ部屋の中に入れる。
「失礼します。誰か居ますか。」
鈴花は部屋の中に聞こえるように言った。もし、誰かが中に居るなら即退場だろう。しかし、全く反応が無い。室内には沢山の書物があり、どれも埃を被っている。目の前には本の壁があり、奥の様子は分からない。後ろを見れば、京子がしきりに辺りを気にしている。
鈴花は京子の行動を不思議に思い、声をかけた。その言葉に京子は驚く。
「今誰かに見つかったら大変でしょうが。」
再度周りを見る京子。よっぽど心配なようだ。
鈴花は京子に応えつつ再び部屋の中を確認する。誰も居ないことを確認すると、さらに引き戸を引いて体ごと入れるようにした。そして、部屋の外に居る京子を見る。
「誰か居た。」
鈴花の質問に京子は心配そうな表情で首を振る。今のところ誰にも見つかっていないようである。
「じゃあ、入ろうよ。」
鈴花は開かずの間に体ごと入った。背後から京子の声が聞こえたが構わず進む。室内に入ると以前どこかで嗅いだ事のある匂いがす

る。具体的にどこであるかは記憶に無いが古い匂いだ。それに粉っぽい匂いもする。粉は埃だと考えられるのであまり体には宜しく無いだろう。

鈴花が二、三歩歩くと、その隙間に京子が入ってきた。そして、すぐに引き戸を閉める。京子は大きくため息をつくと彼女を見た。

「見つからなかったみたい。放課後で良かったわ。」

京子の視線はそのまま部屋の中へと移動する。まず、真横に本の壁がある。見るからに厚い本が沢山積まれている。背表紙が見えるものもあるが全部日本語以外の言語で書かれているためか何と書かれているか分からない。

鈴花は部屋の奥へと進んだ。真横にある本の壁を越えると、窓からの光に照らされた木のテーブルを見つける。テーブルの上にはやはり本の山がある。テーブルもその上に置かれた本も埃を被っている。見える範囲で最近何かが移動された形跡は見当たらない。

「この窓、曇りガラスなんだね。」

京子は本に埋もれそうな窓を見ていた。彼女の目の前には彼女の身長ぐらいの本棚があり中には沢山の本がある。入りきらない本が棚の上に無造作に置かれ窓からの光を所々遮っていた。

鈴花が周りを見るとテーブルを中心に四方向に本棚があることが分かった。出入り口側の本棚は小さく、同様に棚の上に本が置かれている。それでも置ききれないのか本棚の背後に本の壁を形成している。他二方は壁一面の本棚があり、本を取る為の小さな梯子もあった、

「なんだろう。この部屋。」

鈴花はテーブルの横を通って壁一面の本棚に近づく。本の背表紙に目を通すも、見たことの無い本ばかりだった。

「そうだね。図書館にしては小さいだろうし。」

京子は壁一面の本棚を見る。鈴花もつられて本棚を見た。この本がすべて落ちてきたら怪我は免れないだろう。

鈴花は棚に入っている一冊を取り出して開いてみる。ページをめ

くっていくも彼女には理解できない内容であった。彼女は本を閉じて元の場所に戻す。
鈴花が本を見ることを止めて京子の所へ戻ろうとした時、彼女の目の前に何かが降ってきた。それは床に落ちて鈍い音を発する。突然の事だったために彼女は飛びのき、遅れて気が付いた京子も同様に飛びのいた。
「な、何。何が降ってきたの。」
鈴花はさらに後退しようとすると、動揺しているためか足を滑らせて尻餅をついた。彼女はさらに後退しようとしたが、本棚がそれを拒む。後退することが出来なくなり、ようやく降ってきた物体を見た。そして、天井を見る。そこには黒い穴が開いていた。彼女は物体にゆっくりと近づく。それはビニールに包まれた本のようで、上から紐で縛ってあった。彼女はそれを恐る恐る手に取る。ビニールは汚れていて、新しい物では無い事はすぐにわかった。
「ねえ、先生に知らせようよ。」
京子は心配そうに鈴花に言う。しかし、鈴花自身は彼女の声よりも目の前の本が気になった。
鈴花はゆっくりと紐を解き、ビニールを取る。中には黒く分厚い本があった。しかし、不思議と重くは無い。
「綺麗。ビニールに包まれていたからかな。」
鈴花は表紙や背表紙、裏表紙を見る。それぞれの表紙には文字の代わりに模様が描かれていた。彼女は黒い本を開く。しかし、いくらめくっても白紙のページのみである。彼女は首を傾げながらも本を閉じた。本を閉じると表紙の模様が一瞬光り、本その物が跡形も無く消えてしまった。
「え、なんで。どこいったの。」
鈴花は今さっきまで本を載せていた手を見る。そして、辺りを見た、しかし、先ほどの本は見当たらない。本を包んでいたビニールも紐も同様に見当たらない。
「この部屋なんか怖いよ。早く出よう。」

鈴花は京子に腕を引っ張られながら開かずの間を出た。その間も、彼女は消えた本が気になった。何故消えたのだろう。そして、何のために。

鈴花はもう一度開かずの間に入ろうとしたが京子が止めた。

「戻っても何も無いよ。今日はお互い疲れているんだと思う。帰って休もうよ。」

鈴花は京子の言うとおり素直に帰宅した。しかし、帰宅してからも黒い本の事が頭から離れず結局そのまま次の日を迎えた。

第二話　違和感

第二話　違和感

聴こえてくる目覚まし時計の音。鈴花は時計が鳴り始めるとすぐに目を開けて止めた。あくびをしながら起き上がる。身支度を済ませると鞄を持って一階にあるリビングへと移動した。ちょうど鈴花の母親が出かける所であった。

「鈴花。おはよう。先行くからあとお願いね。」

母親が玄関から出て行く。ふと今日は早番だっただろうかと鈴花は思った。しかし、仕事なのだから急遽変わることもあるだろう。母親が家を出たために鈴花一人となった。この家には母親と鈴花の二人しか住んでいない。父親は鈴花が小さいときに病気で死んでいる。だから、鈴花は父親を知らない。知っていたとしても思い出すことができない。

鈴花はリビングの椅子に座り、横に鞄を置く。彼女の目の前にある皿にはサンドイッチが二つ載せてある。彼女は一つを取って食べた。パンのためかのどが渇き冷蔵庫から牛乳を出して飲む。残りの一つも平らげ皿を台所に持っていって洗う。彼女は皿を洗い終えて、濡れた手を拭きながら時間を見た。すると、予鈴十五分前であった。昨日のようにぎりぎりでは行きたくない。タオルを定位置に戻すと鞄を持って玄関から出た。外気温は高くないものの太陽が温度を上げようと光を発している。

鈴花は玄関に鍵をかけると学校へ向かって歩き出した。何人かの小学生が列を成して歩いている。彼女はその様を見ながら、彼女自身も昔同じようにしたことを思い出す。あれから何年たったのだろうか。

そんなことを考えている間に学校の校門を抜けて昇降口へと入った。まだ予鈴が鳴っていないためか昇降口に居る生徒は多い。

鈴花は素早く上履きに履き替えると階段を上る。階段を上り終えたとき、ふと昨日入った開かずの間を見た。すると、今日は鍵がかかっている。やはり、昨日鈴花たちよりも先にあの部屋に入った人間が居るのだと思った。しかし、それが誰なのかは分からないし知る方法も無いのでこれ以上考えないことにした。

「京子。おはよう。」

鈴花は先に来ていた京子に挨拶をしながら自分の席に鞄を置いた。そして、椅子に座ると京子のほうに体を向ける。

「ねえ、さっき見てきたんだけどさ。やっぱり、開かずの間に鍵がかかっていたよ。昨日は誰が開けたんだろうね。」

鈴花の言葉に京子は首をかしげ困惑しているように見える。鈴花はその姿に、自分が何か良くないことを言ったのかと考えてしまった。

「昨日誰かが開けた。何を言ってるの。開かずの間に鍵がかかっているなんて当たり前じゃない。開いている所なんて一度も見たこと無いわよ。」

京子は鈴花の発言に理解出来ないようで、冗談として捉えているようだ。

鈴花は京子の反応が理解できなかった。何故なら昨日彼女と二人で確かに開かずの間へ入ったからである。彼女は京子が何故昨日のことを覚えていないのか気になった。しかし、京子にその話をしたとしても、彼女が望んだ答えが返ってくるとは限らない。そのため、この話はここまでにした。

鈴花は前を向いて、鞄の中の教科書類を机の中にしまおうとした。しかし、机の奥に何かあるようで教科書類が机の中に収まらない。彼女は教科書を机の上に置いて、奥にある何かを取り出そうと手を入れた。触れた感触は硬く厚い物。すぐに机の奥から引っ張り出した。

鈴花が机の中から現れた物を見たとき、体の中を衝撃が走った。机の中から出てきたもの。それは、昨日見た黒く分厚い本である。

本の表紙には昨日見たとおりの模様が描かれている。彼女は危うく悲鳴を上げそうになったが、今はホームルーム前の教室内なのでどうにか堪えた。

「な、なんで。なんでここにあるの。」

鈴花は誰にも聞こえないように一人つぶやく。そしてすぐに昨日のことを思い出した。黒い本は開かずの間で見つけ、そしてそこで消えたのだ。机の中にあるはずが無い。必死に現実に抵抗するも実物が目の前にあるために勝ち目は無いと思い考えることをやめた。

鈴花は黒い本を素早く鞄の中にしまうと机の上に置いた教科書類を机の中にしまった。そして、鞄の中にしまった黒い本を取り出し、恐る恐る開いた。適当にページを開いたが中は昨日見た通り白紙である。突然の本の登場から何かあるのではないかと期待した。しかし、結局何も無かったのである。

鈴花は首をかしげ、本を閉めようとした。その時、ひとりでにページがめくられ始めた。彼女は目を見開き、自動的にページがめくられる様を見た。ページめくりは本の最初のページで止まる。彼女が一ページ目を良く見ると、ゆっくりと白紙に黒い文字が浮かび上がっていく。一ページに浮かび上がる文字は鈴花の知らない言語で書かれており、彼女は読むことができない。文字が浮かび終えるとページが自動的にめくられた。彼女は瞬時に本から顔を離すと、周りに居るクラスメイトを見た。見た限り何時もと同じである。しかし、何だろう。この表現しがたい違和感は。

鈴花は再び本に視線を戻した。新しいページに絵がゆっくりと浮かび上がってきている事が確認出来た。絵は本の上部からゆっくりと印刷されていくように表示されていく。しかし、途中までしか表示されていないためか何なのか分からない。

その時、チャイムが鳴った。

鈴花は反射的に前を向く。ホームルームのチャイムだ。先生が教室にくる。彼女は絵が浮かび上がる途中のまま本を勢いよく閉じて、鞄の中にしまった。すぐに何時も見る担任の先生が現れた。そして、

朝のホームルームが始まる。
ホームルームが終わり担任の先生が教室を出て行く。鈴花はそれを確認すると鞄に入れた本を取り出して見ようとした。しかし、確かに鞄に入れたはずの本は跡形も無く消え去っていた。昨日と同様にまた何処かへ行ってしまったのである。彼女は仕方なく授業に向かう事にした。

第三話　明かされた現実

第三話　明かされた現実

授業は何時もと同じであり、クラスメイトも変わりない。鈴花がホームルーム前に感じた違和感はいつの間にかどこかへ消えてしまった。

「今日はおしまい。また明日。」

最後の授業が終わり先生が教室を出て行く。鈴花は帰りの支度をしようと机の横にかけておいた鞄を上に置く。鞄は軽く、やはり何も入っていないように感じる。やはり、朝入れた本はこの鞄には戻ることはないのだろうか。彼女は再びあの本を開き表示された絵を見たいと思いつつ机の中の教科書類を鞄の中に入れようとした。

その時、開いた鞄の奥に二つの目を持つ黒くて大きな蛙が見えた。

鈴花は小さな悲鳴とともに反射的に鞄から体を離す。悲鳴を聞きつけて近くに居た京子が近づいてきた。

「どうしたの。」

京子は不思議そうに鈴花に聞いてくる。鈴花自身はそのような状態では無い。

「かばん、鞄の中。」

鈴花は震えながら鞄の中の蛙を指差す。彼女の言葉に京子は鞄の中を覗き込む。京子は鞄の中を一度覗き込むとすぐに顔を戻した。

「鞄の中には何も無いよ。」

鈴花はその言葉に京子と鞄の中に未だ陣取っている蛙を見る。京子には蛙が見えていない。それは何故、何故なんだろう。彼女の行動から京子の顔が少しずつ笑えない顔になっていく。

「疲れているんじゃない。早く帰って休んだほうが良いよ。」

京子はそれだけ言うと、他の子と一緒に教室を出て行く。

鈴花がその姿を目で追いかけていると、いつの間にか教室には彼

女以外誰も居なくなってしまった。彼女は外から聞こえる生徒たちの声を聴きながら再度鞄の中を見た。集中すればするほど怖いからだ。自分の体が震えていることは彼女自身良く分かっている。未だ鞄の中に存在する蛙は動かずじっとこちらを見ている。

「な、なんで蛙なのよ。」

見れば見るほど叫びたくなる。鈴花は蛙が好きではないのだ。身近に居て一番お会いしたくない相手である。

「なんだよ。蛙じゃ駄目かよ。」

鈴花は声に驚き、声の主を探して教室内を見回す。しかし、誰も居ない。彼女は唯一可能性のある鞄の中の蛙を見る。

「ここだよ。ここ。」

蛙の口の動きに合わせて声が聞こえてくる。信じられないが、確かに声の出所は蛙であった。鈴花は椅子に座りながらも後退する。

「蛙が、蛙が喋ってる。」

鈴花は蛙からさらに遠ざかろうと後退する。すると、椅子から床に落ちてしまった。お尻のあたりをぶつけたが、痛みよりも今目の前で起こっている事が気になった。鞄を見ると、その中から蛙が跳び出して彼女の椅子の上に着地した。

「蛙じゃなければ何が良いんだ。言ってみろ。」

光の下にさらされた蛙の肌は黒く表面を光が反射していた。

「ぬめりが無いやつ。」

鈴花は体を液体で包む動物はいやだった。触った時の感触を想像してしまうからである。

「そうか。たとえばこんなのか。」

目の前に居る蛙は白く柔らかそうな物体に変わり、そして別のものへと変化した。

「これでどうだ。ん。」

鈴花は言葉が出なくなってしまった。先ほどまで蛙だったものが、今は白い羽が生えた小さな人間の姿をしている。まるで天使のように見えるが顔はあまりかわいくない。

「なんだ。これも駄目か。これなら人間受けすると思ったんだけどな。」
鈴花は声が出ないため、慌てて首を振った。先ほどの蛙に比べればまだ良いほうだ。気持ち悪くも無い。
「これでいいのか。よし、これで決定。」
羽の生えた小さな人間は羽をはばたかせて宙に浮く。そして、鈴花の周りを円を描くように回り始めた。彼女は回り始めた小さな人間を目で追う。
「あ、あなた誰なの。何故私の所に来たの。」
羽の生えた小さな人間はぴたりと止まり、鈴花を見る。
「俺はハルだ。あんたの鞄の中を見てみな。話はそれからだ。」
鈴花は驚きながらも、這って机の上の鞄を引っ張る。鞄を床に落とすと、その中に手を入れた。すると、本が入っている事に気付く。彼女は鞄の中から本を取り出した。
「やっぱり。」
鈴花の手には朝に見た黒く分厚い本がある。
「俺はその本の番人……まあいい。本を開いてみな。」
鈴花はハルの言葉通り鈴花は本を開く。すると、自動的にページがめくれて、あるページを開いた。そのページは朝のホームルーム直前に見たページだった。そこには今や途中までしか見ていない絵の完全版が存在している。その絵は緑色の丸い円盤の形をしていて、そこにはよく分からない模様が描かれていた。しかし、彼女はそれが何であるかわからない。
「そいつがこれからお前を襲うやつさ。」
鈴花は驚きハルを見る。ハルの言っていることが良く分からない。何故彼女が襲われることになったのだろうか。ハルはそんな彼女を気にせず続けた。
「そいつを倒せるのはお前とその本だけ……。」
「ちょっと待って、良くわかんないよ。なんで私なの。何でそいつを倒さないといけないのよ。」

ハルの言葉を遮るように鈴花は言う。彼女はなんとか立ち上がるとハルをじっと見た。ハルの言葉に現実味が無い。まるでおとぎ話のような感覚を覚えてしまう。
「それは俺にも分からない。だが、その本がお前を選んだんだ。鈴花。」
鈴花はハルに名前を呼ばれると、さらに現実味が無くなった。
「なんで、知っているのよ。私の名前。」
ハルは一度頷くと黒い本を見た。
「その本から聞いたんだ。それだけさ。」
ハルの言葉から、元は黒い本が鈴花の名前を知っていたことになる。何故本が彼女の名前を知っているのだろう。ますます良く分からない状態になる。
「良く分からないわ。帰る。」
鈴花は黒い本を閉じると、荷物をまとめて教室の出入り口へ向かって歩いた。
「それは無理だな。もう、お前さんが家に帰っても誰も居ないよ。」
鈴花は驚き、ハルを見る。彼女は彼の落ち着いた姿に動揺する。
「な、なんで。今日だって朝家から……。」
すると、手に持っている荷物が急に軽くなった事に気が付く。自らの手を見てみると鞄が消えて黒い本だけになっていた。
「どういうこと。どういうことなのよ。」
鈴花は黒い本だけを持ってハルに近づいていく。その迫力にハルは少し後退する。
ハルの話ではここは鈴花の居た世界と人間以外は同じらしい。既にこの世界には人間は居ないらしく、朝からずっと彼女の周りの人間を黒い本が見せていたというのである。これは突然別の世界に入り込んだら混乱するためであるとハルは説明しているが、結局今混乱している。
鈴花はその場に座り込んだ。気が付けば人々の声さえも聞こえなくなっている。これまで常に何かしらの音を耳から聞いていたため

か、無音であったことが無い。そのため、急に怖くなった。
「本当に私たちしか居ないの。他に誰も居ないの。」
鈴花は机にしがみつきながらハルを見る。本当に悪い夢を見ているようだ。ハルは彼女の言葉に頷き外を見る。
「俺たちだけだ。あとは、お前を襲う敵だけだな。ほら、来たぞ。」
鈴花はすぐに窓に近づく、遠くから大きな丸い物体が近づいて来ていることがわかった。しかし、太陽を背にしているためか丸い以外はわからない。しかし、予想は付いている。本に描かれていた得体の知れないもの。彼女はゆっくりと窓から離れた。
「ほら、本を開きな。あんたしかあいつを倒せないんだからな。」
背後からハルの声がする。この世界に鈴花たち以外居ないならば、彼女がやるしかない。彼女は言われるままに本を開く。自動的に先ほど見た緑色の円盤のページになり、横に少しずつ文字が浮かび上がる。しかし、その文字は鈴花の知らない言語のためか読むことができない。文字が完全に浮かび上がると、自動的にページがめくれる。次のページには鈴花にも読める言語で文章が浮かび上がってきた。
「倒し方。」
本には緑色の円盤の倒し方が二ページに渡って書かれているようだ。しかし、何故なんだろう。鈴花はさらに近づいた円盤を見た。
「こんな方法で倒せるって言うの。」
鈴花は唇を軽く噛むと勢い良く本を閉じた。そして、廊下へ向かって走り出す。
「やれば良いんでしょ。ハル、あんたも来なさい。」
鈴花はハルを見る。すると、ハルは彼女に近づいてきた。
「言われなくても付いていくさ。俺はその本の番人だからな。」
そして、鈴花たちは誰も居ない廊下を走って、一階へと降りた。

第四話　壊と解

第四話　壊と解

学校の一階には職員室、家庭科室、校長室の他に理科室がある。黒い本に書かれていた倒し方。それは計十個の数式とその答えを理科室、一年一組以降順に各教室の黒板にチョークで書いていく事。倒し方のページを良く見ると家庭科室は含まれて居ないようである。

鈴花が通う学校は各学年三クラスずつある。故に理科室と合わせれば黒板は計十つ。すべての計算式は単純で既に本のページに書かれている。そのため、彼女は順に書いていけば難なく出来ると考えた。

「まずは理科室よ。」

鈴花が勢い良く階段を駆け下りると、目の前に現れる理科室の出入り口。彼女は引き戸に手をかけた。難なく戸は開き、理科室内に入る。その時、ちょうど窓から外が見えた。緑色の円盤は確実に学校に近づいている。

早くしなければ。鈴花は良くわからない恐怖に怯えながら段差を上って黒板の前に立つ。しかし、大切なものが無い。

「チョ、チョーク。チョークどこ。」

鈴花は辺りを探す。チョーク入れも確認するが一本も入っていない。おかしいぐらいに空である。

「これを使え。」

背後から聞こえるハルの声に振り返ると、白く小さな物が飛んできた。受け取って見てみると新品のチョークである。

「これ、どこにあったの。」

黒板の周りには無かった。ならば、ハルはどこからチョークを探してきたのだろうか。しかも一度も使われて居ない新品である。

「話は後だ。早く書け。」

鈴花はハルの言葉に弾かれるように黒板のほうを向く。そして、黒い本に表示されている一つ目の式を書いた。単純な足し算である。黒板に問題と答えを素早く書き記す。黒板から一歩さがり黒板に書いた式を確認する。単純な問題ほど計算ミスをしやすいからだ。彼女は正しい事を確認するとチョークを持ったまま理科室を出て階段を上る。次は一年一組である。

「なんで、どこにチョークがあったの。」

鈴花は走りながら、後ろにいるハルに言った。走りながらのためか息が荒い。

「出したんだよ。チョークが無ければ書けないだろ。」

ハルが言うには自分の手で新品のチョークを出したらしい。鈴花は手品師なのではないかと言ったが簡単に否定されてしまった。その間に鈴花たちは一年一組の教室に入る。

鈴花は黒板に向かいながら先ほどよりも辺りが暗くなっていることに気が付く。答えを書き終わり、教室外に出る前に外をふと見ると太陽を遮った円盤がさらに近づいていた。

鈴花は叫びそうになりながら順に各教室の黒板に問題と答えを書いていく。自分の教室が終わり、三階へ向かう途中校舎が激しく揺れた。彼女は振動で立っていられなくなりその場に座り込んでしまう。

「来たぞ。早くしろ。」

ハルは鈴花の手を引っ張って立たせる。その時、複数の窓ガラスが割れる音がした。何かが侵入したのだ、何かが。

鈴花は急いで階段を上り、一番端の三年一組に入る。窓の外に見えるのは緑色の円盤。円盤に刻まれた模様が青く光っている。

鈴花は呼吸がさらに荒くなる感覚を覚えながら黒板に新しい式を書いていく。式を書き終えて答えを書こうとしたとき、間近で窓ガラスが割れる音がした。外を見ると案の定窓ガラスの一つが割れている。そして、ガラスの割れた場所から黒く細い手が教室内に侵入してきた。

「いや、いやあ。」
鈴花は答えを書ききり教室を出る。次の教室へ入るとき一組のほうを一瞬見ると既に手が廊下へと伸びていた。しかし、それだけではなかった。二組の窓にも同様の手が居るのだ。しかし、窓は割られておらず侵入されていない。複数の黒い手が窓を叩いているだけである。彼女は素早く問題を見ながら黒板に書き写し、問題を解く。九問目のためか三桁と二桁の数字の足し算となっていた。三桁ではもう暗算で答えを出すのは怖いので、黒板の空いているところで計算を始めた。黒板にチョークが当たる音がする。
鈴花は計算の答えが分かると、すぐに結果をイコールの後に書いた。そして、教室を出ようとしたとき、教室の前の出入り口から手が見えた。彼女は後ろ側の出入り口へ向かって走る。その時、背後で窓が割れる音がした。その音を聞きながら二組の教室を出てそのまま三組の教室へ入る。入る直前、奥の階段から何本かの手が見えた。彼女は泣きそうになりながら最後の問題を黒板に書く。最後は三桁同士の足し算だった。しかし、単純な数字だったため別途計算を書かずに直接書き込んだ。
「これでおしまいかな。あとは。」
鈴花は最後の答えを黒板に書き記すと黒い本を見た。するとすべての数式が青白く光り、その下に最後の行動が浮かび上がった。
「屋上。」
最後の場所は屋上であった。鈴花は教室から出ようとする。しかし、既に前後の出入り口からそれぞれ複数の手が侵入している。窓を見れば複数の手が窓を叩いている。ガラスが割れて外からも侵入されたらおしまいだ。
「ここは俺の出番だな。付いてきな。」
ハルは鈴花の前に出る。そして、教室の後ろ側の出入り口に向かって飛んだ。しかし、出入り口には既に複数の手があり、出る前につかまりそうである。それでもハルは一直線に出入り口に向かっていった。教室内に入ってきた手がハルを捕まえようと手を伸ばして

くる。ハルはその手を回避し、彼女の手を掴む。そのまま出入り口を通って廊下まで引っ張った。彼女はハルに引っ張られたことによって黒い手に触れず宙に浮いたまま廊下へと出た。彼女はハルの手を掴んだまま着地する。すると、すぐにハルは彼女から手を離した。あとは自分で走れと言うことだろう。

鈴花は黒い手を避けながら屋上へ続く階段を上り、屋上へと出た。屋上に出て初めに目についたのは緑色の円盤である。校舎とほぼ同じ高さの円盤はいまやぴったりと校舎にくっついている。円盤が屋上に目標が移動したことを認識したのか、細い手が円盤の中から生えてきた。すぐに、彼女は本に書かれたとおり黒い本を開いたまま足元に置く。

鈴花は本から少し離れて何かが起きることを待った。ハルは本体と三階から来る手に注意を払いながら彼女の傍に来る。すると、倒し方のページに書かれたすべきことが順に白く光る。最後にすべきことが白い光を失ったとき、黒い本は自ら宙に浮いた。

そして、黒い本は跡形も無く消えてしまう。直後、再び校舎が揺れる。それとともに鈴花たちに近づいていた手が本体へと戻っていった。

鈴花は円盤へと少しずつ近づいた。すると、少しずつ円盤の高さが低くなっていることに気が付く。円盤の高さが校舎の高さを下回ると、彼女は屋上から円盤を見下ろした。すると、校舎の側面に大きな黒い円が出来ていた。その中へ少しずつ緑色の円盤の体の一部が吸い込まれていく。緑色の円盤はまるで空気が抜けるように小さくなっていく。最終的に緑色の円盤は小さな丸い塊に圧縮されて黒い円の中に吸い込まれた。吸い込まれると、すぐに黒い円は消える。

鈴花は校舎の側面から目を離し、再び屋上を見る。すると、黒い本が再び宙に浮いた状態で姿を現した。彼女は近づき本を手に取る。倒し方のページから自動的にページがめくられ、緑色の円盤の絵が描かれたページになる。そして、絵の横にある未だ読めない言語で書かれた文章の下に赤い文字列が浮かび上がった。やはり、この赤

い文字列も彼女には読めない。ハルも同じページを覗き込んでいる。すると満足そうに本から顔を離した。
「倒せたみたいだな。」
鈴花はハルと本のページを見る。これが倒せたということなのかもしれない。すると、黒い本は自動的にめくれて「倒し方」の次のページになった。しかし、何も書かれていないし何も書かれない。
「さっきの緑色の円盤はどこへ行ったの。」
鈴花はハルに尋ねるも、彼は首を横に振るだけである。ハル自身にもわからないのだろう。再び黒い本を見ても何も書かれていない。彼女は黒い本を閉じた。
「ひとまず、現状がどうなっているのか。知っていることを話してもらうわよ。」
鈴花はハルを見た。彼だけが彼女よりも先に黒い本に関わっている。何かわかるかもしれない。
日が落ちた空はゆっくりと光を失い始めていた。

第五話　帰路

第五話　帰路

鈴花たちは学校の校門前に立っていた。日が落ちて暗くなった道は本当に暗く静かである。彼女たち以外に人間が居ないためかどの家にも明かりは無い。街灯の光も無いため、真っ暗な世界が鈴花たちの目の前に広がっていた。この状態では何処かに行こうにも難しい状態である。

鈴花は人々を照らす街灯が急に懐かしくなった。明かりが灯っていればどれほど安心出来るだろうか。それと共に暗闇への恐怖も和らぐ。しかし、今この状態は人間の中にある恐怖心を無理やり外に引っ張り出す以外の何ものにも役立てていない。

「暗くて、なんか怖い。どうしよう。これじゃ家に帰れないよ。」

鈴花はしゃがみ込み目の前にある自宅への道を見た。自宅と言っても彼女が住んでいる建物と同一のものであるだけである。元は誰の家なのかわからない。

すると、暗闇でハルが黒い本をじっと見ていることが確認出来た。

「道を照らす光があれば良いんだろ。」

ハルは鈴花を見て、街灯がある辺りを見た。すると、彼が見た街灯に明かりが灯っていく。

「すごい。どうやったの。ねえ、まさかハルって魔法使いなの。」

鈴花は驚き声を上げる。目の前で起きている事が信じられなかった。まるで魔法である。チョークも魔法で出したのではないかと考えてしまうほどである。

「魔法なんて非科学的なもの、俺には使えない。それに、これを実際やっているのはこの本だ。」

ハルは鈴花の持つ黒い本を見る。

街灯に明かりが灯されたためか、だいぶ色々なものが見えるよう

になった。
鈴花たちはその中を歩き出す。彼女が歩けばそれに合わせてハルが街灯に明かりを灯していく。街灯の明かりは彼女が通り過ぎるとともに順に消えてく。これは無駄が無い。しかし、そうだとしたら黒い本が自ら光れば明かりとして良いのではないかと考えてしまう。彼女がそのことをハルに言えば、彼は驚き彼女を見る。
「鈴花のところじゃ本は明かりとして使われているのか。」
鈴花はハルからの単純な質問に反論しようにも否定しか出来ない。本自体を燃やせば良いと考えても、それでは本がつかえなくなってしまう。結局ところ本は明かりにはならないのだ。
鈴花は周りが明るくなり、安心出来るようになる。すると、彼女は次にハルに抱いている疑問の解消へと取り掛かった。
「ハルって最初からこの世界に居たの。」
鈴花がハルを見ると彼は首を横に振った。彼は彼女を手助けするために黒い本と一緒にこの世界に連れてこられたらしい。彼にはそれ以前にどこに居たかといった記憶は無いらしい。その事について黒い本が知っているかもしれないと彼は言う。しかし、黒い本は何も言わない。
鈴花はハル自身を非科学的な存在として考えてみた。しかし、そこで問題が発生する。非科学的な存在が同じ部類に属する魔法の使用を否定しているのだ。つまり、そのことから彼自身も科学的な何かで構成されていると考えられる。現時点でこれ以上わからないため、ハルが何であるかについての考察はここでやめることにした。
鈴花は気を取り直して次の質問をする。
「ねえ、さっき出てきたような敵ってまだこれからも一杯出てくるの。」
鈴花は歩きながら横目でハルを見る。しかし、彼から返ってきた言葉は良いものでは無かった。
「幾つ居るのか俺にはわからない。こいつも幾つ出てくるかについては何も言ってないし教えてくれない。案外こいつ自身も知らない

のかもしれないな。」
　ハルは黒い本を見ながら言った。ハルの話では彼と本の間で意思疎通が可能であるとの事である。だとしたら何故実際に使用する鈴花と黒い本の意思疎通を可能にしなかったのだろうか。これが仕様というものなのかと考える。それとも彼女から見て本として存在すべき対象だからなのだろうか。疑問はあるが、案の定黒い本の回答は無いためこの質問は終わらせた。
「じゃあさ、敵を全部倒したら私は元の世界に戻れるよね。まさか戻れないってことは無いよね。」
　鈴花は一番心配なことを聞いた。生きて戻れるかどうかである。望んでこんな所に来たわけではないのである。しかし、敵の目標は彼女であり、逃げたところで何も変わらないと考えた。この疑問について黒い本からの回答があった。
「お前が生きてすべての敵を倒し終えたら元の世界に戻してくれるんだとよ。」
　黒い本の回答から最後まで生きていれば帰れるとの事である。また、パートナーとしてハルと共に出来る限り彼女を守るとの回答もある。この話は心配すればするほど質問と回答の連続になると考えられたため、これ以上の質問は避けた。
「そういえば、この本の……。」
　鈴花は黒い本を開き、緑色の円盤の絵が描かれたページを開こうとした。すると、自動的にページがめくれて目的のページが開かれる。彼女は手でページをめくっていない。ただ開こうと思っただけである。これが科学的であると言われても信じがたい。
「この文章って何が書かれているの。」
　鈴花は緑色の円盤の絵が描かれたページの横にある文章を指差した。ハルは本を覗き込みその文章を見る。
「これは敵の名前、体長、体重などの情報だ。ついでにこの赤い文字はな……。」
　ハルは本から顔を離すと鈴花を見た。

「敵を倒すことが出来ましたって意味の文字列だ。学校のテストとかであるだろ、『よくできました』ってのが。あれと同じだ。その赤い文字列が出た時点で敵は倒せたって事だ。無ければ未だしぶとく生きてるって事さ。この赤い文字が出るまでは気を抜かないことだな。」

ハルはそこで大きく息を吸い、ゆっくりと吐いた。そして目の前にある闇を見て続けた。

「俺が今いろいろ喋っているが、この情報はみんな黒い本から聞いたんだけどな。俺はただ伝えていい情報を伝えているだけさ。」

ハルはただの代弁者であり、決して偉くは無いと本人は言う。しかし、黒い本と直接意思疎通が出来ない鈴花にとって彼は必要な存在である。

「このさっき倒した敵の名前ってなんなの。」

鈴花は本に書かれた敵の名前と思われる文字列を指差す。そしてハルを見た。彼は目だけを彼女に向けた。

「Ｎｅｂｕｌａ（ネビュラ）だ。」

ハルは言い終えると再び前を向く。星雲を意味するその名は何かの始まりを意味しているのだろうか。考えているうちに朝は鈴花の自宅であった家に着く。

鈴花は玄関に走りより、ドアのノブを回してみる。すると鍵はかかっておらず難なく開いた。登校前に鍵をかけたはずであるがそれさえも黒い本が見せていたのかもしれない。彼女は後ろに居るハルを見た。

「私の家じゃないけど。ここで休みましょう。私の家と同じだから。」

鈴花はそのまま家の中に入る。遅れてハルも家の中に入った。

第六話　敵対策

第六話　敵対策

鈴花たちは家の中に入る。それとともに家の中に明かりが灯る。彼女は黒い本が明かりを点けたのだと思った。家の中には朝に見た物は一つも無い。リビングやダイニングを見ると食べ物が見つかり、誰かが住んでいたことがわかる。ここに住んでいた人も、やはり何処かへ消えてしまったのだろうか。彼女の家であるのに彼女の家では無い。そんな新しい感覚をもたらすこの家の中を彼女は歩き回った。各部屋を回りどのような使われ方をしているのか調べる。家の中のすべての明かりが点いているわけでは無い。そのため彼女は黒い本を持ったままハルと一緒に回った。

住人がそれぞれ使用していた部屋は三つ。本が沢山ある部屋。両親が使っていたらしい部屋。そして、子供が使っていたらしい部屋である。子供が使っていたらしい部屋は彼女が元の世界で使用していた。

鈴花は子供が使っていたらしい部屋へ入った。部屋中に良くわからないポスターが貼られている。この部屋の主が好きなアイドルだろうか。彼女は机の上を見る。すると、写真があった。家族の写真である。両親とその間に居る彼女、そう彼女。

鈴花は目を見開き、写真から素早く顔を離す。ハルは何かあったのかと聞く。彼女はゆっくりとハルを見る。そして、震える手で写真を指差した。

「ねえ、なんで。なんで私が、この写真の中に居るの。ねえ、なんで。」

二人の間に写っている少女は確かに鈴花であった。今の彼女よりも大人びて見える。よく見れば隣に居るのは彼女の母親である。反対側に居る男は見たことが無い。この男は一体誰なのだろうか。写

真から父親だと考えられる。写真の日付を見れば彼女が過ごしたことの無い未来がしるされていた。
ハルは写真に近づき、彼女と交互に見る。
「どういう事なの。これって、私じゃない。」
写真を見れば見るほど彼女の頭の中がかき混ぜられる感覚を味わう。彼女は机に両手を付いてしゃがみこんだ。わけが分からず気持ち悪い。何か得体の知れないものを吐き出しそうだ。
「こっちにも私が居て。私よりも大人びていて……。」
鈴花は何度も首を横に振ると、立ち上がって再度写真を見た。
「意味がわからない。この世界にも私が居たって事なの。彼女も消えちゃったの。」
鈴花は机に手をついてじっと写真を見る。そして、ハルを見た。
「彼女の代わりに私が呼ばれたって事なの。そうなの。」
憶測の域を出ない考えが頭の中を回り続ける。ハルは鈴花の持つ黒い本を見るも首を横に振るだけである。やはり、教えてくれない。
鈴花はその場に座り込み大きく深呼吸した。落ち着かなければやっていられない。ここにはこの世界の彼女と彼女の母親が確かに居たのだ。そして、父親らしき男も。彼女は部屋の中を見る。一見するとこの世界の彼女とは趣味が合わないようだ。
鈴花は落ち着くと室内に配置されているベッドへとダイブした。片手に持つ黒い本をベッドの傍に置く。
「ハルって、敵が来たことがわかるの。」
鈴花の言葉にハルは頷く。ネビュラの時も彼女が本を開く前に気が付いていたため、そうではないかと思っていた。
「じゃあ、何かあったら起こして。」
鈴花はそれだけ言うと布団の中にもぐりこんだ。直後、照明が消えるとともにドアを開け閉めする音が聞こえる。ハルが部屋の外に出たのかもしれない。布団からはどこかで嗅いだことのある匂いがする。その匂いを吸い込みながら彼女は眠りについた。

鈴花は空腹で目が覚める。考えてみれば昼から何も食べていない。外を見れば未だ暗く夜だということがわかった。軽く目を擦りながら起き上がる。黒い本を持つと立ち上がり背伸びをする。それから暗い中スイッチを探して照明を点けた。ひさしぶりに見た光の強さに目を背けそうになる。それから彼女はドアを開いて廊下へと出た。廊下の照明を点け、部屋の照明を消す。彼女は廊下を歩き階段を下りて一階のダイニングルームへと到達した。すると、そこには既に明かりが灯っていた。

「待ってたぞ。腹減ってるだろ。」

テーブルの上に載せられた料理の数々とお茶。ハルの話では麦茶らしい。そして、それ以上に目を引いたハルのコック姿。空飛ぶコックである。どこからそんな衣装が出てきたのか謎である。

「すごい。これ全部作ったの。」

鈴花は空いている椅子に黒い本を置くと自らも椅子に座った。目の前には湯気の立ち昇るおいしそうな料理が並んでいる。冷蔵庫にあった材料から作ったのだろうか。よくわからない。彼女はじっと料理を見て、ハルを見た。

「うまいぞ。多分。」

ハルの言葉に鈴花は料理に手をつける。初めは恐る恐るであったが、一口二口と食べるとおいしさに気がつく。それからは箸を置くことなく食べ続けた。ハルを見れば同様に食事を始めていた。なんと、彼は椅子に座って食べているのである。蛙から変身した時を最後に今まで飛んでばかりであったため、椅子に座っている姿は普段とは違う状態に見えた。

それぞれが食事を終え、麦茶を飲みながら落ち着く。鈴花は周りを見渡す。そして、ハルを見た。

「お風呂。入れない、よね。」

鈴花は照明や料理ができるのだから、お風呂も沸かせるかもしれないと思った。しかし、初めから出来るとは考えない。黒い本やハ

ルにも出来ないことがあるだろうから。
「家で生活していく上で行うことは全部出来るぞ。お風呂だって洗顔だって歯磨きだってな。それにいちいち黒い本を持ち歩くのも大変だろ。用が無いときは俺がもっていてやるよ。」
ハルは椅子の上に置かれた黒い本を持つ。すると、次の瞬間本は跡形も無く消えてしまった。
「き、消えた。何処いったの。何処に隠したの。」
鈴花は驚き慌てる。まるで手品である。しかし、彼は手品師では無い。何処に隠したのだろうか。
「心配するな。今は俺の体の中にある。俺はあくまでも本の番人だ。お前が呼べばすぐに駆けつけるし、言えばすぐに本を出すことも出来る。何か必要なものがあったら俺に言え。」
ハルは席を立つと汚れた皿を素早く回収してキッチンに持っていく。そこで彼は何かに気がついたらしくすぐに鈴花のほうに戻ってきた。
「風呂に入るんだったら着替えを脱衣所に用意しといてやる。あとは何かあったら呼べ。」
ハルはそれだけ言うとキッチンに戻っていく。
鈴花はお風呂場へと続く廊下を歩く。窓の外は真っ暗で、今何時なのか全く分からない。お風呂から出たら時計を見ようと思った。彼女は脱衣所に入ると乾いたタオルがあるか確認する。彼女はすぐに服を脱いで風呂場へと入った。風呂場はさすがにこっちの世界もあっちの世界も使われ方はほぼ同じで、あまり変わりがなかった。変わっている部分といえばシャンプー類の銘柄だろう。見たことはあるが使ったことの無い銘柄ばかりである。この際、勝手に使わせてもらっている身分なので品質の問題があるにせよつべこべ言わずに黙って使うことにした。
鈴花がお風呂から出ると、いつの間にか着替えが乾いたタオルと

ともに置かれていた。彼女はお風呂場の照明を消すと、体を拭いて服を着た。置かれていたのは大きめのパジャマである。彼女は脱いだ服をまとめる。制服は洗えないので軽くたたんで持つ。そして、頭に乾いたタオルを巻きつけながら洗面所へと向かった。

洗面所には新しい歯ブラシ、歯磨き粉とコップが置いてあった。

鈴花は歯ブラシに歯磨き粉をつけて歯を磨き始めた。歯磨き粉についてはシャンプー同様気にしないことにした。磨き終えると口をゆすぎ、タオルで拭いた。歯ブラシとコップを揃えると二階の彼女の部屋に向かった。

鈴花は部屋に入るとハンガーを探して制服を壁にかける。こんなときでもしわになるのは嫌だからである。彼女は制服の表面についた小さなゴミを払うとリビングへと戻った。

鈴花はリビングに置かれたソファに腰をおろして天井を見上げる。ハルも何処からとも無くリビングに来て別のソファに座った。

「さっき寝たから眠く無いわ。」

ダイニングの横に位置するリビングは大きなテーブルを中心に二つのソファとテレビがある。テレビがあっても見られるかどうかは怪しい。鈴花はソファに両足を乗せて横になった。

「暇だわ。」

鈴花は目を瞑り仰向けに寝る。眠くないもののすることが無ければ眠っていたい。

「仕方ないな。」

鈴花は目を開きハルを見る。彼はテレビに近づく。そして、彼は彼女を見た。

「眠れないならこれでも見て勉強すると良い。」

ハルは手をかざすと、すぐにテレビに映像が映される。彼は映し出されたことを確認するとソファに座った。テレビに映し出されたのは数学の各分野の名前である。

「本当は古典文学もあるんだけどな。今後を考えればこっちを見ておいたほうが良いだろう。」

ハルはテレビの画面を見ながら言った。数学の各分野のお勉強が出来るようだ。ハルに言えば彼が操作してくれるらしい。ざっと中身を見てみると範囲は中学数学だ。夕方戦ったネビュラを見る限り、敵を倒すには数式を解いて答えを書いていかなければならない。理由はどうであれそれが敵を倒す方法なのである。だとしたら、多項式や方程式といった数式の計算を重点的に調べておけば良さそうだ。今は単純な足し算だけだが、今後それだけでは終わらないだろう。なぜなら、これをハルが出した時点でそれ以外の分野の問題も扱いうると言っているようなものである。照明のようにこれらは黒い本が裏で行っていると考えられるからだ。黒い本は多くを語らない。しかし、必要と思われるものは提供する。だとしたら、これも必要と思われるものなのだろう。

「部屋に行って紙とペンを探してくる。」

鈴花はソファを立つとリビングを出て、彼女の部屋へと向かった。耳や目で分かったとしても脳が理解しなければどうしようも無い。手で書かなければ覚えないのだ。彼女は照明を点けると部屋の中へ入り、筆記用具と紙を探す。部屋主には悪いが無駄に浪費するわけではないので見逃して欲しいところだ。机の上にあるペンと机の中にあった何もかかれて居ないノートを取り出す。表紙にはただ彼女の名前が書いてあった。まるで前から自分のものであったかのような感覚と、それでも自分では無い人間のものであるという感覚が混ざり合う。

鈴花は写真を見る。眠る前に見た三人が写った写真である。一度眠ったためか、今は落ち着いて見ることが出来た。この三人はこの世界の鈴花とその両親なのだ。ペンとノートを右手に持ち、左手で写真に軽く触れる。

「何故こんなことが起きたの。」

鈴花は写真の中に居るもう一人の自分に問う。この世界で何かが起こったのだ。けど、彼女は何も知らない。知ることができない。

鈴花はしゃがみこみ机の引き出しに背中をつける。

「私は誰のために戦っているんだろう。」
見上げた天井には、ただ鈴花のために光を放つ照明だけがある。
彼女は立ち上がり、照明を消すと部屋を出た。

鈴花は紙にペンで数式とその答えを書いていく。基本的な問題でも解法が分からなければ解けない。忘れていた解き方を思い出していく。まるで実力テスト前の状態である。広範囲の数学を勉強して、試験に挑む。違うのは間違えればただでは済まされない点だ。何故敵を倒すために数式を解かなければいけないのか疑問である。このことはハルも黒い本も教えてくれない。ただ、そうであると理解したほうがよさそうだ。
「もうだめ。疲れた、寝たい。」
鈴花はソファにもたれかかり、薄目で天井を見上げる。時計を見ていないがそろそろ明るくなる頃かもしれない。彼女はゆっくりと立ち上がりカーテンを開く。瞬間、太陽の光が目に入る。彼女は目を瞑って顔を背けた。ゆっくりと目を開くと明るい朝が見えた。
「休んだほうがいいだろう。」
背後からハルの声が聞こえる。鈴花はゆっくりと振り返った。
「部屋で眠ってくる。消しといてもらえる。」
鈴花はテレビの画面を見た。今も画面には数式が表示されている。
鈴花は大きくあくびをすると部屋を出て階段を上った。そのまま彼女の部屋へと入り、ベッドに倒れこむ。カーテンを少し開けると部屋の中に差し込んでくる朝日。彼女は疲れたためかそのまま眠ってしまった。

第七話　物資調達

第七話　物資調達

鈴花が起きたのは午後だった。太陽の光によって部屋の温度が上昇したためだ。暑さに起こされたためかまだ周りがぼやけて見える。再度眠りたいがこの暑さでは難しいので仕方なく起きた。部屋の中を見ればエアコンらしきものも見えるが、使えるかどうか分からないためやめておいた。

鈴花は階段を下りてリビングに入った。カーテンは開けられ、部屋の中に光が入ってきている。しかし、この部屋は何故か涼しい。まさかと思ってハルに聞いてみる。すると案の定エアコンが稼動中のようだ。ハルも暑いのは苦手なのだろうか。これならば自分が眠っていた部屋もお願いすれば良かったと思う。少し汗ばんだ体が冷たい風によって一気に冷やされていく。科学の力は恐ろしいものである。このような冷たい空気や暖かい空気を部屋の中に送ることが出来るのだから。

鈴花はソファに座り、すぐに冷蔵庫に向かう。こんなときは何か飲み物が必要である。確か冷蔵庫の中に麦茶があったはずだ。昨日の食事時に飲んだのだから。

鈴花は冷蔵庫の扉を勢い良く開けた。しかし、中には麦茶なんて入っていない。それどころか食材も残り少ない。

「ねえ、麦茶無いの。」

鈴花はリビングに居るハルに聞く。返答は「無い。」とのことだ。新しく作っていないらしい。何か飲みたい。何か飲み物を。

「のど乾いたわ。どうにかならない。」

鈴花はダイニングからリビングに居るハルに聞く。必要なものがあったら聞けと言ったのはハルである。だったら聞こうではないか。

「蛇口をひねってみな。」

鈴花はハルの言うとおりに台所の蛇口をひねってみると水が出てきた。生ぬるくなく適度に冷たい。彼女はコップに水を汲んで飲んだ。体に水がしみこんでいく。もう一度水を汲むとリビングのテーブルに置いて、ソファに座った。

「水はどうにかなるが、食べ物が無いんだよな。それに……。」

ハルはそこで、鈴花の服を見る。今はまだパジャマのままである。鈴花は彼の視線を感じて逃れようとする。彼は腕を組んで一点を見つめた。ゆっくり一呼吸したのち、彼は彼女を見た。

「着る服も無いしな。買い物に行くか。必要なものを揃えよう。」

ハルの言葉を一瞬理解できなかった。今この世界には鈴花たちしかいないのだ。なのに買い物なんて出来るのだろうか。それとも、品物がそのままスーパー等に残ったままなのだろうか。彼女自身よくわからない状態である。

ハルは夕方になったら出かけようと言った。それまで、彼女はこの涼しい部屋でテレビを見ることにした。映し出されるのは数学の式では無く昔話の世界である。本のように自動的にページがめくれ、文字と音とアニメーションが画面に表示されていく。見ることの出来る作品は、一話完結ものから複数話に分かれた長編まで様々である。鈴花はそれらを見ながら外が涼しくなるのを待った。

午後の日差しが弱まった頃。ハルの声で鈴花は買い物に行くための準備を始めた。

「他に誰も居ないんだからそのままでも良いんだぞ。」

ハルの声を背後に、鈴花はパジャマのまま二階の彼女が眠った部屋へと向かう。そこで、タンスの中やクローゼットの中を見た。良さそうな服を出して着てみるが大きくて似合わない。なんとか体に合うサイズの物を探してみる。見つかったものの、自分の好きになれない服だった。しかし、他に選択肢はないため仕方なく着ることにした。パジャマに入ったチョークを取り出して服のポケットに入

れる。その服のまま階段を下りてリビングへと入った。
ハルは鈴花の服にコメントしようが無いようで何度も見るが何も言わない。
「さてと、行くか。」
鈴花たちは玄関から外へ出た。太陽の光が弱まったためかあまり暑くない。
「建物が同じだとしたら。駅前に行けばすべて揃うわ。」
鈴花たちは駅前へ向かって歩き出す。歩いていると所々地面が変形していることに気がつく。何か重いものがこの道の上を通ったのだろうか。彼女たちは変形している地面を避けながら歩いた。
鈴花たちは住宅街をぬけてさらに歩く。駅前の大通りに入った途端、彼女の背筋に何かが走った。普段は車も人もひっきりなしに通る大通り。しかし、今は彼女たち以外動くものは見えない。それにどの店も閉まっているように見える。「世界の終わり」という言葉が見事に当てはまってしまう光景である。彼女はしきりに周りを見ながら大通りを歩いた。
「びくびくすんな。俺たち以外誰も居ないって言っただろ。」
鈴花はハルの言葉を聞くも、それでもやはり周りを見る。駅が見える位置まで来ると目の前に大きな建物が見えた。巨大な専門店だ。ここに入れば衣料品や雑貨が一通り揃う。それに地下一階には食品売り場もある。しかし、今は他の店と同様に閉店しているかのような状態だろう。誰も居ない店内は気分の良いものでは無い。それに品物を勝手に持っていくのも良くないように感じた。
「この大きなお店よ。ここで全部揃える。」
専門店の入り口に着くと、案の定明かりは無く寂しい状態であった。まるで閉店したあとのようだ。鈴花は太陽を見る。まだ明るく辺りを照らしているが、彼女がこの店から出てくる頃も辺りを照らしているのだろうか。
鈴花は入り口のドアを開ける。そして、ハルとともに中に入った。入った途端、中にある照明が手前から順に点されていく。彼女は驚

くがすぐに黒い本がしたのだと理解した。それ以上は気にせず歩き出すと、目の前に複数の半透明の白い物体が現れ始めた。それは人の形をしていて、次第に白から違う色に変化していく。
「ど、どういうこと。」
鈴花はゆっくりと後退する。色が実際の人の色に到達すると、その物体は人として動き出した。彼女はすぐにハルを見た。彼は驚きもせず彼女と動き出した人を交互に見ている。まさか、これも黒い本が見せているのだろうか。彼女は再度現れた人たちを見た。ある人は店の従業員。またある人は店の客。まるでここだけ人の居る世界であるように思えてしまう。
「さてと、さっさと買い物するぞ。」
ハルは店の奥へ向かって移動を始めた。鈴花もその後を追って歩き出す。彼は器用に人と人の間をすり抜けながら進んでいく。まるで、人とぶつからない最適なルートを知っているかのようである。
「ハルちょっと待ってよ。」
鈴花はハルに追いつこうとして正面から歩いてきた女の人にぶつかってしまう。彼女はすぐに謝る。すると、相手も謝ってどこかへ歩いていった。見せているものといえども相手は形あるものである。彼女はすぐにハルを追いかける。彼女はその途中でよく服を買う店を見つけた。
「ハル。こっち来て。」
鈴花の声にハルはすぐに戻ってくる。ハルが何処まで行っても、物を買いたいのは彼女のほうである。
「悪いな。こんなところ初めてだから気になってね。」
鈴花は一度ハルを見ると目の前の店へと入った。中には店員と数人の客。どれも黒い本が見せているのだろう。彼女は早速良さそうな服を選ぶ。ハルを見れば彼女の後ろで黙って見守っている。そういえば、ハルは男か女かと言えば男なのだろうか。
鈴花は気に入った服を見つけては試着してハルに見せていく。数回の試着後、ハルのやる気の無い視線が彼女に向けられる。正直彼

にとってはどれでも良いのだろう。
鈴花は最終的に決めた服を着て試着室を出てきた。それは上が橙色と黄色が混じったTシャツ、下はデニムのショートパンツ。パンツにした理由は動きやすさを重視した結果である。彼女は他に色違いのプリーツスカート二着とTシャツ三枚を持ってハルの前に立つ。
「おまたせ。」
鈴花はハルの前で軽くポーズを取ってみる。その姿を見たハルは呆れ顔で何度か頷く。彼女は店員に、今着ているものはこのまま着て帰ると伝える。すると、服から値札類を取り外し、着てきた服を袋に入れてくれた。二人は会計を済ませるためにレジに向かう。しかし、ここで問題がある。そもそも彼女はお金を持っていない。それでは誰が出すというのだろうか。
「これでお願いします。」
店員が会計を伝えるとハルがお金を出す。鈴花はすぐにそのお金を見て本物かどうか確認する。紙幣にはしっかり透かしが入っていて、どのように見ても本物である。彼は感嘆する彼女の手からお金を取り上げると店員に渡した。金額ちょうどで支払い、レシートと袋に包んだ商品をもらう。そして、二人は店を出て歩きだした。
「なんで、どうやってお金を出したの。」
鈴花はハルに聞く。彼女にとってハルがお金を出すこと自体が不思議でならない。何故お金を持っている。何故それがここで使える。いや、お金までも黒い本が見せているものなのかもしれない。
鈴花は次に別のお店で下着類を選んだ。やはりまわりがあっても中身が無ければ意味が無い。選んだ下着類をレジに持っていく。今回もハルがお金を出した。選んだ下着を彼に見られるのは恥ずかしいが、この際仕方が無い事とした。彼女は新たな袋を持って店を出た。対象が服のためか、体積が大きい割に重さはほとんど無い。そのため、複数持っていても気にならなかった。
鈴花たちは次に地下へと降りて食品の調達を開始する。カートにかごを置いて押していく。ここでも周りには主婦や子供が沢山居た。

彼女は保存の出来るものを中心にかごに入れていく。少なめに購入して、またあとで買いに来るなど面倒である。彼女が新たな品物を入れたとき、彼女の手の上に沢山のお菓子が投下された。彼女はびっくりして手をひっこめる。見れば、ハルがお菓子を持ってきたようだ。

「菓子類は賞味期限が長めだからな。それに甘いものは必要だ。」

鈴花はハルが持ってきたお菓子を見るとスナック菓子やクッキー類があった。小腹が空いたときに食べるのには良さそうである。しかし、その中に乾パンが無い。非常食ならこれは欠かせない。彼女は菓子類のコーナーに向かう。そして、缶入りの乾パンをかごに入れていった。

鈴花は改めてかごを見てみた。今や二つのかごがほぼ満杯となっている。缶類、麺類、菓子類といったところである。

「そうだ。飲み物。」

鈴花はカートを押してペットボトルが置かれているコーナーへ向かう。食品が重いためか、カートを押すために力を使う。ハルが先に向かい、適当な清涼飲料水を箱ごと持ってきた。彼女はそれを確認すると、そのままレジに向かう。ここでもハルが取り出すお金を用いて支払いを済ませた。ふと彼女は気になった。ハルが使えるお金はいくらぐらいなのだろうか。

鈴花はかごに入った品物をビニール袋に入れていく。缶類がぶつかって金属音を響かせる。品物を全部袋に入れると手に持とうとした。しかし、持ち上がらない。缶類ばかりが袋に入っているためか、彼女の筋力では持ち上がらないようだ。

「しゃあねえな。」

ハルはそれだけ言うと、食品の袋を軽々と持ち上げる。次の瞬間には彼の手にある袋はどこかへ消えてしまった。

「黒い本と一緒に保管しといてやる。ほら、それもだ。」

ハルは鈴花が持っている服が入った袋も一緒に消してしまった。彼の話では黒い本と同様に必要なときは出してくれるらしい。全く、

ハルの体は何で出来ているのだろうか。興味深いところである。
鈴花たちは手ぶらで食品売り場を後にする。そして、階段を上って店の外へ出た。
鈴花は歩き出したが、ハルがついてこないことに気がつき振り返る。彼はじっと空を見ている。彼女はハルに横に立ち、彼の見る方向を見る。しかし、何も見えない。
「来るぞ。」
ハルは黒い本を取り出し、鈴花に渡す。彼女はすぐに本を開いた。自動的にページがめくれ、何も書かれていないページに絵が現れ始める。絵が完全に表示されると、横に文字列が表示された。絵はヒトデのような星型の姿をしている。ネビュラとは違い、まるで空飛ぶ円盤のようだ。円形では無く星型である点が違うが。
鈴花は空を見る。ビルの陰から、絵と同じ物体が現れ始める。
「Ｔａｎｉｔｈ（タニス）だ。」
タニスと呼ばれた星型の物体、その下部の一点が光り始めた。
鈴花は何かと思い、よく見ようとする。すると、ハルは彼女の腕を引っ張る。彼女はその力でバランスを崩し、そのまま地面に倒れた。その直後、彼女が居た場所に光の線が走る。光の線が走った場所はまるで大きな電動カッターで切ったかのように綺麗に線が入っていた。彼女は目を見開き、タニスを見る。
「私を真っ二つに切ろうっていうの。」
鈴花は立ち上がり、タニスを見る。その下部が再び光り始めていた。

第八話　切り刻む光

第八話　切り刻む光

タニスの下部から再び光の線が発射される。鈴花は横に避けると走り出した。走りながら黒い本を見る。ページには既に倒し方が表示されていた。そこには数式とその式と答えを書く場所が記されている。

「掲示板。なんで掲示板なのよ。」

式と答えを書く場所は掲示板。何故かはわからないが、とにかく掲示板に書けということらしい。

鈴花は道路を渡って近くの駅へ向かう。駅なら掲示板があるはずだ。

鈴花は駅へ続く階段を上り始めた。橋上駅のためか階段を上った先に駅がある。すると、光の線が目の前にある階段と通路の境目を勢い良く切った。このままでは階段が切り離される。彼女は必死に階段を上った。

あと少しで階段は終わる。そう思った直後、鈴花の体が降下する感覚を味わう。階段が落下し始めたのだ。彼女はそれを脳で理解すると反射的に目の前にある通路へジャンプした。ハルは彼女の手を引っ張り、通路上へと着地させる。それとほぼ同時に背後で大きな音がした。彼女が振り向けば階段が落ちていた。一緒に落ちたら怪我は免れなかっただろう。上空を見ればタニスがこちらに近づいてきている。彼女はすぐに駅に向かって走り始めた。

鈴花はタニスから放たれる光線を避けながら駅構内に入った。通路の片側は壁になっていて、もう片側はガラス張りになっている。ここには大きな掲示板がある。それにタニスが通路と同じ高さに降りてこなければ何処にいるかはわからないはずである。掲示板の前に着くと、張られたポスター類を引き剥がす。ポスターの上から書

いては掲示板に書いているとは言えない。破く行為に罪悪感を覚えたが、そんなことはみんな後回しである。
鈴花は早速ポケットからチョークを取り出し、本のページに書かれた数式とその答えを書いていく。今回は足し算、引き算と掛け算だ。このままだと割り算も出てくるだろう。なぜ計算をさせるのだろうか。
数式は前回同様十個ある。定数は一桁から三桁。それに加えて足し算、引き算と掛け算が使用されている。掛け算はある数を何倍かするものだ。故に、掛け算の式では足し算や引き算に比べてさらに計算時間がかかると予想した。
鈴花は二問目を終えて三問目の式を書き始めた。その視界の端、通路の出入り口付近に光の線が見えた。彼女はその方向を見るが、線はすぐに消えてしまった。鈴花は一呼吸の後、再度掲示板を向いて式と答えを書き始める。
「書きながら聞け。あいつは俺らごと輪切りにする気だぞ。」
ハルの声が背後から聞こえてくる。再度光の線が見えた方向を見ると、天井から床に向かって光の線が降りていく。まるで巨大なロールケーキを切り分けるが如く、ゆっくりと通路を切っていく。しかし、二箇所以上を切っても通路は落下しない。構造上切っても落下しないようになっているのかもしれない。
「ふ、ふざけないでよ。」
鈴花の叫び声が通路に響く。光の線はコンクリートを容易く切る。彼女はすぐに掲示板を見て、残りの式を書き始めた。
鈴花が五問目を書き終わることろには光の線がすぐ目の前まで来ていた。彼女は答えを書き終えると、近くまで来た光の線をじっと見る。
鈴花は光の線が床に消えると既に切られた方向へ移動する。ハルも一緒に移動した。振り返り反対側の通路を見ると、目の前に光の線が降りてくる。単純な行動だが、これで光線を避けることが出来た。よく見ると、光の線が通路を切る速度は遅く、切る間隔は広い。

彼女は反対側の通路を未だ輪切りにする光の線を横目に問題を解いていった。
六問目を書き終え、七問目の式を書き始める頃には光の線は反対側の出入り口に到達していた。
「ハル。タニスの攻撃見といて。」
鈴花は数式を書きながら言う。相手はさっきの攻撃方法で彼女を倒すことはできなかった。さて、次はどうするのだろうか。
「分かってるよ。俺だって無駄に居るわけじゃないんだ。」
鈴花は背後から聞こえる声に押されて、数式の解答を早める。七問目は三桁の掛け算。別途計算しなければ解けない。鈴花は素早く空いている部分に計算式を書いていく。
「鈴花。来たぞ。」
鈴花はハルの声で周りを見る。すると、窓の外に見える大きな物体。タニスだ。その下部が光り始める。彼女はすぐに残りの計算をして答えを書く。早く書き終わらそうとしたためか最後は殴り書きになる。書き終わるとすぐに体が浮く感覚を覚えた。驚き周りを見ると、足元を光の線が通っていく。縦で駄目なら横に切ろうということだろうか。そこで初めてハルが自分を抱えて飛んでいることに気がついた。
「お前が死んだら困るんだよ。」
ハルは鈴花を重そうにしているわけではなく、どちらかといえば光の線に気がつかなかった彼女を怒っているように思えた。ハルは光の線が通り過ぎると彼女を床に降ろす。タニスを見れば、再び光の線を出そうと下部を光らせている。彼女は反対側の出入り口に向かって走り出した。ここにこれ以上居ては不利だ。どこか別のところが無いか考える。そこで、彼女は思い出す。ここは駅前、だとしたらすぐ近くに大学がある。大学があるなら掲示板もあるはずだ。
「大学に行くわ。」
鈴花は背後に居るはずのハルに言う。彼女は光の線を避けながら階段を駆け下りた。道路を渡って、正門から大学内に入る。

「あったぞ。掲示板だ。」
目の前に掲示板があった。しかし、外からみえる場所であるため安心して計算できない。
「他、他に無いの。」
鈴花はそう言いながら素早く周りの建物を見る。しかし、良さそうな掲示板は見当たらない。周りの建物に近づき中を覗いてみるも掲示板らしきものは無い。彼女たちは仕方なく木々が囲む広場を抜けてコンクリートで固められた大きな建物に入った。入った理由は他の建物に比べて窓が少なく、外から見えづらいからである。決してこの中に掲示板があると確信したわけではない。ただどこかタニスに見つかりづらいところに入りたかっただけである。中に入ると二階天井部分に天窓が見えた。すぐに振り向き、外を見る。広場の木々のせいか地上近くにタニスは見えない。
「おい、ここに掲示板があるぞ。」
鈴花はハルの声のする方向へ向かう。すると、複数の掲示板が見つかった。この建物の中にも掲示板があったのである。しかし、すべてガラスで覆われている。これでは書けない。どうしようかと考えたとき、再び体が宙に浮く。ハルが抱えていることはすぐにわかった。足元を光の線が通っていく。ただの光の線ならば特に何も無く地面に降り立てる。しかし、降りられない。降りられないほどの速度で光の線が移動しているのである。先ほどの光の線の移動がロールケーキの切り分けならば、今回はハムを水平に薄く、しかも高速に切っているようなものである。彼女はハルに抱えられたまま上昇していく。しかし、天窓がある位置までしかいけない。周りには各階の通路と部屋が見えるが、それさえも光の線は切っている。
鈴花とハルはついに天窓に到達する。彼女が天窓を叩いてもびくともしない。しかし、簡単に割れるような窓では実用面で困る。
「お願い割れて。助けて。」
下からは光線が建物をスライスしてきている。触れれば彼女やハルも見事スライスされてしまうだろう。通路に入ってさらに階段を

上ることが唯一助かる方法である。しかし、今からでは階段に到達する前に光の線に触れることは確実だ。
「仕方ないな。突破するぞ。」
鈴花はハルの声が聞こえた瞬間、体が重力に従って落下する感覚を覚える。落下してはスライスされてしまう。彼女は叫んだ。その体を何か不透明なものが包み込む。直後、体に激痛が走った。痛みが引くとともに視界が開け、建物の一階に倒れている事が分かった。見上げれば光の線がさらに上に向かって建物をスライスしている。再び激痛が走った。すぐに体を見る。しかし、どこか切れたわけでは無いようだ。光の線を突破したのに何故切れていないのだろうか。
「痛みは感じただろうが、怪我はしてないはずだ。」
鈴花の前にハルが現れる。ハルが守ってくれたのだろうか。まさか、どうやってやったというのだろう。しかし、今はその質問をしている暇は無い。鈴花は掲示板に向かう。光線でガラスもスライスされたためか、何かで軽く叩けば割れそうだ。彼女は周りを見る。すると、金属製のゴミ箱があった。ゴミ箱をひっくり返して中身を出すと、掲示板のガラス目掛けてゴミ箱を振り下ろす。直後、ガラスの割れる音がする。何度か叩くとガラスの破片が周りに飛散る代わりに掲示板からガラスの部分が除かれていく。残りの数式が書けるぐらいにガラスが割れると、鈴花は黒い本を見て残り問題を書き始めた。頭上では未だ光の線が建物をスライス中である。
「痛い。」
鈴花は勢い余って、未だ取り除いていないガラスの部分に触れて手を切ってしまう。手から血が流れ出すが、それさえも今は気にしていられなかった。ガラスを割った掲示板で書けたのは二問。彼女は残り一問を書くために他の掲示板のガラスを割ろうとする。しかし、その体が宙に浮かぶ。再びハルの登場である。今回はどんな状況かと周りを見れば、彼女の目が大きく開かれる。タニスが天窓を光線でくり貫いているのである。直後一階に落下する天窓。周囲に飛び散るガラスの破片。上空からゆっくりと降りてくるタニス。も

う笑いたくなるほどの状態である。
ハルは彼女の体を抱えたまま、建物から素早く出た。それを光の線が追いかける。彼は鈴花を抱えたまま広場を抜けて来た道を戻った。そして、見えてきたのは外から見える掲示板。その掲示板にまっすぐ進んでいく。
鈴花は近くにあったゴミ箱を掴むと、宙に浮かんだままガラスに力いっぱい叩き付けた。ガラスは音を立てて割れる。本を見て式を書こうとしたとき、新しい式がページに浮かび上がる。他の式に比べれば凄く簡単な計算式である。良くわからないがすばやくその式書いて答えを書いた。直後、タニスが現れる。そのタニスの下部が光り始めた。しかし、すぐに光は消えてしまった。まさか、攻撃してこないのだろうか。
「タニス見といて。」
鈴花はゴミ箱でさらにガラスを割ると最後の問題を解いた。時間がかかったが、邪魔されること無く解くが出来た。彼女はタニスを見る。近くに居るものの。未だ下部は光らない。まるでガス欠のようにも見える。ガスを使っているとは到底思えないが。
鈴花は黒い本を見た。すべての数式と答えを書いたのだ。あとは最後の指示があるのなら従うまでである。しかし、書いた数式のうち一つが光らず、一番下に赤文字で「光の無い式について、再度式と解答を記述せよ」と表示される。つまり答えを間違ったということだ。光っていないのは七番目の式である。すぐに計算をしなおす。三桁の掛け算など小学生以降あまりしていない。これ以上間違うと脳が暴走しそうだ。
「これで、おわり……。」
鈴花が答えを書き終わった直後、ハルが彼女の体を抱えて飛ぶ。タニスを見れば光の線を彼女たちに飛ばしている。今や光の線は縦横無尽に移動している。
鈴花は飛びながら黒い本を見る。すると、赤い文字は消え、すべての数式が青白く光った。その後、すべてのすべきことが順に光る

と最後にすべきことが浮かび上がる。
それは、本を空に投げろという事だった。
鈴花は本を閉じると、勢いをつけて空に投げた。すると、黒い本は空中で静止して、黒く丸い塊へと変化する。その後、黒い塊はタニスに向けて黒い何かを飛ばし始めた。黒い何かは柔らかく、タニスの体に次々とくっ付いていく。ただくっ付くだけでは無く、黒い何かはくっ付くとタニスの体に付きながら移動を始める。見ていると気持ち悪い光景だ。ついには光線を出す下部を黒い何かが覆ってしまった。彼女たちは光線が止まったため、地面に降り立つ。しかし、目の前の光景から目が離せない。黒い塊を見れば先ほどよりも小さくなっている。タニスを見れば既に本体の色が見えなくなり、黒い物体と化していた。タニスが暴れているのか激しく動いている。
すべての黒い塊が黒い何かとしてタニスにくっ付くと、少しずつ黒く覆われたタニスが小さくなっていく。最終的には元の黒い塊に戻り、消えてしまった。
そして、鈴花の目の前に黒い本が出現する。彼女は本を手に取ると開いた。自動的にページが移動してタニスの絵が描かれているページになる。そして、右側にある文字列の一番下に赤い文字が表示された。つまり、倒したということである。
「倒せたみたいね。危なかったわ。」
鈴花が黒い本を見れば自動的にページがめくれて何も無いページが表示される。これは敵を倒した後に必ずする事なのかも知れない。
鈴花は大きく息を吐くとその場に座り込み、太陽が沈む様を見た。

第九話　奇襲

第九話　奇襲

ドアを閉める音と共に鈴花は玄関に倒れこんだ。何時来るか分からない敵をいちいち気にしていたら身が持たない。タニスは倒すことが出来たが、途中で問題を一問間違ったのは失敗であった。

「ほら、ソファにでも倒れこんでろ。」

鈴花はハルの言葉でゆっくりと起き上がる。足取りがおぼつかないままリビングにあるソファに倒れこんだ。正直もう動きたくない。ハルはため息をつきながら取り出したのは複数の袋。これは服が入った袋である。彼女は頭だけ上げて袋を受け取ると再び頭をソファにくっつけた。彼女の位置からは見えないが、今ハルは冷蔵庫に食品類を入れているようである。

ハルは人間のようで人間では無い存在。タニス戦の後、鈴花は建物を高速にスライスする光線をどうやって避けたのかについてハルに聞いてみた。しかし、彼は教えてくれなかった。ただ、「お前は知らなくていいんだ。」と言うばかりである。

鈴花はハルに空腹を訴えながら足をばたつかせる。彼女はハルがどんな物が食べたいかと聞いてきたため、冷たい物と言った。すぐにダイニングで物をあさる音が聞こえてくる。冷たい物。さて、どんなものが出てくるのだろうか。

しばらく待つと、ハルの声がダイニングから聞こえてきた。鈴花は彼の声でダイニングに移動する。ダイニングに移動すると、テーブルの上にそうめんとツナを載せた皿があった。ツナは今日買ってきたものだ。しかし、そうめんは購入していない。何処から出てきたのだろうか。彼女は座り、そうめんの出所を彼に聞いた。答えはこの家に残っていたとの事だ。去年の分が残っていたか、今年のために購入しておいたものだろう。そこで彼女は思った。だとしたら

そうめんもお店に売っていたのではないだろうか。ハルに聞けば、多分売っていたとの事である。今回購入した分で終わればよいが、終わらなければ今度はそうめんを探してみよう。
鈴花は挨拶をして、冷たい麺とツナを食べ始めた。冷たくて細い麺はすぐに胃の中に納まる。食後の挨拶を済ませるとリビングに戻った。しばらくするとハルが後片付けを済ませてリビングに来る。
「何する。また勉強でもするか。」
ハルの言葉に鈴花は首を振る。お腹がいっぱいの状態ではあまり物事を考えたくは無い。彼女はしばらくこのままで居ると告げた。ハルもソファにもたれかかる。
しばらくの後、鈴花はソファから勢い良く起き上がった。
「お風呂入ってくるわ。」
鈴花は袋を持って階段を上り、二階の彼女の部屋に入る。机にチョークを置くと、昨日来たパジャマと新しいパジャマと下着類をもって脱衣所に向かった。昨日来たパジャマは今日着た分と合わせて洗濯物にまわす。お風呂から出ると着替えて歯磨き後にリビングに戻った。
「洗濯物が溜まっただろ。洗って乾かしといてやる。」
鈴花はハルの発言に少々恥ずかしさを覚えた。しかし、彼以外に見られることも無いので良いと考えることとした。彼女はハルに就寝前の挨拶を言うと二階の彼女の部屋へと戻る。そして、そのままベッドに倒れこんだ。彼女は昼間の疲れからかそのまま眠ってしまった。

どこかで声が聞こえる。誰の声だろう。何度も聞くと思い出してくる。これはハルの声だ。ハルの声、ハルの……。
そこで鈴花は目を覚ました。すぐ横にはハルが居る。険しい表情だ。
「寝ている間に現れやがったぞ。さっさと準備しろ。」

ハルの言葉では敵が現れたということらしい。けど、歯磨きぐらいはしたい。私は立ち上がると部屋を出て階段を下りた。背後からハルの声が聞こえたような気がしたが、何を言っているのか聞き取れなかった。

鈴花が階段を何段か降りたとき、足に激痛が走る。

「い、痛い。」

鈴花は突然の痛みに叫びながら足を引っ込めた。そのまま体のバランスを崩して階段に座り込む。良く見ると、階段の途中まで水がはっている。つまり、浸水しているのだ。しかし、先ほどの痛みはどこから来たのだろうか。彼女は水に触れようとする。

「やめろ。水に触るな。」

鈴花はハルを見るが、手は水に触れてしまう。その瞬間、彼女の手に衝撃が走りすぐに手を引っ込めた。彼女はすぐに水を見る。水に触れたときの感覚では無い、まるで、凄く強い静電気に触れたような感覚である。水なのに電気のような感覚。全くもってよくわからない。彼女はふと違和感を感じて水面をよく見る。すると、少しずつであるが水面が上昇していることがわかった。

鈴花は部屋に戻ってすぐに着替えた。

ハルの話では、彼でも知らないうちに来たらしい。彼は水が普通の水で無いことを確認すると、昨日買って来たものや必要そうなものを全部自分の体の中に保管したとの事である。昨日洗濯した服についても同様との事だ。もし、回収していなかった場合、現状では取りに行くことが出来ない。

鈴花は先ほどまできていたパジャマと今後着る服をハルに投げると、机の上に置いたチョークをポケットに入れる。そして、再度机を見るとそこには家族の写真があった。彼女自身が写っているわけでは無い。しかし、このまま水にのまれるのも良くない。彼女は写真を写真立てから取り出すとチョークとは別のポケットに入れた。そして、彼女は窓を開けて外を見る。家の中と同様に他の家も浸水している。ここは今や浸水した町である。道路を見れば見たことの

無い魚が動いているのが見えた。よく分からないが、この水とともに現れたものに違いない。

「来たぞ。」

ハルの声に部屋のドアを見れば、ゆっくりと水が流れ込んできている。もうすぐ、ここも水の中なのかもしれない。すると彼女の背中にハルがくっついた。すぐに体が浮かび上がり、部屋から出て屋根へと上る。

ハルは鈴花を一旦降ろすと、黒い本を渡した。彼女はすぐに本を開く。新しいページには既に絵と情報が表示されていた。

「Ｖｅｎｉｃｅ（ヴェニス）だ。」

ハルが名前を読み上げる。鈴花はヴェニスという名前について考えてみる。ヴェニスというとヴェネツィア、水の都。彼女は町を見渡す。家々が水に浸り、まるで大洪水の後のようである。しかし、水は濁っておらず澄んでいる。おかげで見たことの無い魚が水の中を動くさまが良く見えた。

「今ここは水の都なのね。」

鈴花は本のページをめくる。そこには敵の倒し方が書かれていた。これが、触れることのできない水と見たことの無い魚を消す方法である。

第十話　浸水する世界で

第十話　浸水する世界で

鈴花が本に書かれた文章を良く読もうとしたとき、背後で何か音がした。鈴花はすぐにその音のするほうを振り向く。その体に、水の塊がぶつかる。直後彼女の体に衝撃が走り、その場にうずくまった。ハルは彼女の体を抱えて飛ぶ。彼女が屋根を見るとそこには水が飛散っていた。同じものをもう一度撃ってきたようだ。しかし、何処から撃ってきたのだろうか。周りを見てもそれらしいものは無い。水の中を泳ぐ魚が水の塊を飛ばしてきたのだろうか。とにかく、今はどこか安全なところで休みたい。

「おい、しっかりしろよ。」

ハルが鈴花に声をかけてくる。彼女は無言で頷く。あまりしゃべりたくない。

鈴花は家から近い四階建てのビルの屋上に降ろされた。他の建物よりも高いため、水面からの距離もある。彼女は屋上に寝転がり、空を見た。今日は晴れていて、太陽も出ている。太陽の光でこの水がみんな蒸発するのなら本当に楽なのにと思った。

「そんな事している暇は無いぞ。」

彼女は頷きながらゆっくりと立ち上がり、本の倒し方のページを見る。今回も十個の数式が書かれている。前回に割り算を加えた四則演算のようだ。割り算が加わった点が前回よりも厄介な点である。しかし、書く場所を指定していないため、今回は楽かもしれない。なぜなら、水面から距離のあるここですべて書いてしまえば良いのだ。

鈴花は早速一問目から順に間違わないようにしっかりと書き始めた。足し算、引き算は何度も計算しているためか、素早く答えを出せるようになっている。慣れとは面白いものである。掛け算、割り

算についても単純な計算は早く解くことが出来た。
鈴花が四問目の答えを書き終えたとき、どこからか声が聞こえてきた。
「だれか、誰か助けてくれ。」
鈴花は立ち上がり、ビルから周りの建物を見る。近くに居るのなら、ここから見えるはずである。案の定、少年が近くの家の屋根に居た。周りを水に囲まれて動けなくなっている。よく見れば先ほどよりも水位が上昇しているようだ。彼女はすぐにハルを見る。
「本が見せてるわけじゃない。本物だ。多分な。」
鈴花はハルに彼を助けるように言うと、式の計算に戻った。一問を解き終わる前に、ハルは少年を屋根の上に連れてきた。彼女は答えを書きながら礼を言う。すぐに背後から声が聞こえたが、気にしないようにした。
鈴花は六問目の式を書き始めると、すぐに手を止めた。そういえば、ハルはこの世界にはもう誰も居ないと言っていた。しかし、すぐそばに一人の少年が居る。この世界の人間が居たのだ。これはどういう事なのだろうか。
「おい、そいつは邪魔するな。」
鈴花はハルの声に振り向く。すると、目の前に少年が立っていた。彼女よりも少し年上のように見える。見たことの無い顔で、髪型はショートだ。
「荒谷、荒谷じゃないか。」
少年はうれしそうに近づき、その場にしゃがむ。鈴花は彼に首をかしげる。何故彼は彼女の名字を知っているのだろうか。
「あなた、誰。」
少年は鈴花に必死に自分の名前を言う。彼は真部宗太と言うらしい。彼女は今まで生きてきた中でそのような名前の人物と知り合ったことは無い。
「あの、人違いでは。」
鈴花はそう言うと書きかけの式を書き終わらせた。宗太は彼女の

言葉にさらに返してくる。彼女は反応せず、代わりにハルが彼を止めようとする。背後から聞こえてくる声。計算に邪魔で仕方が無い。
「二人ともちょっと黙ってて。」
鈴花は二人を見ず計算しながら言った。声が大きかったのかすぐに静かになる。彼女は六問目を終えて七問目の式を書き始めた。式を素早く書き写し、計算を始める。しかし、背後の宗太がしゃべり出した。慌てふためく声、それを黙らせようとするハル。慌てるのは構わないが、邪魔はしないで欲しい。彼女は軽く頭をかきながら答えを書く。彼女はそこで一呼吸する。あと三問だ。
鈴花はチョークを持ち直し、黒い本を片手に持つ。そして、八問目の式を書き始めた。その直後、彼女は自分の体が浮く感覚を覚える。すぐにハルが抱えているのだと理解した。しかし、何も言わずに飛ぶほど緊急だったのだろうか。彼女は周りを見る。すると、ビルにくる前よりもかなり水位が上がっていた。そしてビルの周りには見たことの無い魚が居る。
「あの魚が水を飛ばしてきやがった。」
ハルの話では、鈴花が計算に集中している間に魚たちが集まり、水を飛ばしてきたらしい。そのため、ハルは急いで彼女を抱えてビルを離れたとの事である。彼女は屋根の上で受けた水の塊も魚が飛ばしてきたのだろうと理解した。宗太はというと、ハルの両足を必死に掴んでいるようだ。彼女の背後にハルが居るために宗太は見えない。そこで、ふと彼女は考えた。ハルの足を掴んでいるということは、彼女のスカートのあたりに顔があるのではないだろうか。ためしに足を後方に曲げてみる。すると彼にぶつかった。彼は何か言っているようだが、聞かないようにした。
「ハル。真部って人が変な動きをしたら、そのまま蹴落として良いから。」
彼女はあえて冷たく言い放つ。変なことをしたら私も蹴落とすだろう。彼女の言葉に宗太と何度か言い争う。結果彼は納得し、名前を宗太と呼ぶように言ってきた。よく知らない相手の名前を呼ぶ気

にはなれないが、呼んで欲しいのなら呼んであげよう。
「鈴花。これからどうする。昨日のビルに行くか。」
ハルは駅前に向けて進む。昨日洋服や食品を買ったビルだ。しかし、もっと近くに高いビルがある。鈴花は西を見る。そこにある高いビル。大学にある二十階建ての校舎だ。この地域ではもっとも高い建物だと思われる。彼女はハルに行き先を告げる。ハルは進路を変えて、一直線に大学へと向かった。
大学の敷地内に入ると、昨日走り回った校舎が見える。原型をとどめているが、地震があったら簡単に崩れてしまうだろう。その左に二十階建ての校舎がある。ハルは屋上に向かって高度を上げていく。
「うわ。高い。」
地上を見れば遠く。落ちたら即死だろう。さらに高度を上げて、校舎の上に到達する。屋上に降りると、周りを見渡す。遠くに山が見える。あれは方向からして富士山かもしれない。空を見上げれば太陽が手に届く近さに感じた。
「悪いがそういうのは終わってからにしろ。」
鈴花はハルの言葉を聞いて我に返ると、早速残りの三問を書き出した。どう書いたとしても水位は上昇を続ける。水位が彼女たちの居る高さに到達するまでに書き終わらなければさらに高い建物を目指すしかない。しかし、これ以上高い建物はこのあたりには無い。他の地域に行くとしても時間がかかる。ここで終わらせなければならないのだ。コンクリートの上に音を立てながら白い線を付けていく。九問目の問題を書き始めたとき、手に振動が伝わってきた。
「おいおい、魚どもが集まってきやがったぞ。」
ハルの声が聞こえる。彼の姿は見えないが、屋上から地上を見下ろしているのだろう。しかし、魚が集まったからといってこのような振動を発生することが出来るのだろうか。
手に伝わる振動に邪魔されながら、式と答えを書いていく。振動はさらに強くなり、建物が揺れだす。ここまでくるとまるで地震で

ある。高い建物は地震の時の揺れ方が気持ち悪い。今もそのような状態である。揺れが苦手な彼女は吐きそうになりながらも最後の式を書き、答えを計算する。彼女は自分の呼吸が荒くなっているのがわかった。

鈴花は最後の答えを書き終えると、堪らずその場に寝転がる。ハルや宗太が駆け寄ってくるのが分かったがそれ以上気にしていられない。その状態で黒い本のページを見た。すべての数式が青白く光る。その後、すべてのすべきことが順に光ると最後にすべきことが浮かびあかがった。今回も空に投げろというお達しだ。

鈴花は起き上がり、黒い本を両手で空に投げた。投げた本は空中に静止する。そして、黒い本は黒く丸い塊へと変化した。その直後、黒い塊は弾けて細かい粒となり、周囲に広がっていった。彼女は立ち上がろうとする。しかし、あまり体力が残っていないのかなかなか立てない。その体を宗太が支える。ハルも彼女の前に来た。

「大丈夫か、鈴花。」

鈴花はハルの言葉にただ頷くだけである。今彼女を支えている宗太という人間はよく知らない。しかし、彼女の名前を知っているということはこの世界の彼女を知っているということなのかもしれない。彼女はポケットから写真を取り出す。家を出る前に持ってきたものだ。それを彼に見せた。

「あなたが知っているのはこの子なんでしょ。」

鈴花は宗太に写真を渡すと、彼から離れて周りを見ようとする。すると、彼女の背中に何かが付いた。首だけそちらを向ければ、ハルが体を支えているようだ。

「ここからＩ　ｃａｎ　ｆｌｙされたら困るからな。」

鈴花は英語の部分だけ妙に発音の良いハルに力なく笑う。彼女はそのまま手すりまで移動した。

屋上から見える世界に彼女は何も言えなくなる。見渡す限りすべての地面が黒いのだ。真っ黒い地面の上に校舎や商業ビル。元は触れることのできない液体だということはすぐにわかった。しかし、

あえて黒くしなくてもと思う。敵を吸い込むときや取り付くときは何時も黒い。たまにはもっと明るい色にならないのだろうか。

鈴花は手すりに体重をかけながら、元に戻る世界を眺めた。

第十一話　この世界の人間

第十一話　この世界の人間

鈴花を呼ぶ声が背後から聞こえてくる。彼女は振り返り、声の主を見た。

「何か用。」

声の主は宗太であった。鈴花は手すりに寄りかかりながら彼を見る。彼の手には先ほど彼女が渡した写真がある。

「さっきは焦っていて良く見ていなかったけど。よく見れば写真の荒谷さんと君は別の人みたいだ。」

宗太は写真の子と鈴花を区別することが出来たようだ。彼女はその点に安心した。彼がもしこちらの鈴花と仲良しならば今後色々と面倒なことが起きるに違いない。いや、既に起きているのかもしれない。彼女は宗太から写真を受け取るとポケットにしまいこんだ。

鈴花はその場に座り込み、宗太を見る。そして、彼女は口を開いた。

話した内容は、鈴花の名前と、彼女がこの世界に元から居た人間ではないこと。ハルが人間では無いこと。彼は彼女が持つ黒い本の番人であり、彼女を守る者であること。この世界に居る敵と呼ばれる対象を倒すには彼女と黒い本が必要であること。そのために別の世界から彼女が呼ばれたこと。彼女はハル、黒い本や自分をこの世界に連れてきた者のことはよく知らないということ。彼女がすべての敵を倒せば帰ることが出来るということ。敵の数は把握して居ないこと。困ったときはハルがなんとかしてくれること……。

「あまりべらべらと喋るな。こいつはこの世界の人間だ。外部の俺たちと会ってちゃいけないんだよ。」

ハルの言葉が鈴花の口を塞ぐ。彼女はそれ以上何も言わないことにした。すると、目の前に黒い本が現れた。彼女は黒い本を開いて

敵を倒した事を確認する。確認が終わると本を閉じてハルに渡した。ハルは受け取るとすぐに本はどこかへ消えてしまう。その点に宗太は驚くが、彼女はこれが当たり前なのだと言った。いちいち驚いていても疲れる。彼女はすぐに家に帰ることにした。

鈴花はハルに近づく。ハルも彼女に近づき、彼女の背中に付いた。彼女は宗太を見る。

「あなたも私と一緒に来たほうがいいわ。一人で居たら今度こそ死ぬかもしれないから。」

鈴花の言葉に宗太は目を伏せた。ハルを見れば彼を連れて行きたくないと言う。しかし、このまま置いていけばどこかで敵に殺されるかもしれない。未だ、帰ることが出来ないのだ。今後も敵は出てくるのだろう。彼女がハルを見れば、彼はじっと宗太を見ていた。

「……仕方ない。」

ハルは鈴花を抱えたまま浮かび上がり、宗太に近づく。彼がハルの足を掴むと、家へと向かって移動を始めた。

鈴花たちは彼女の家に到着する。

「早く入りましょう。外は暑いし、お腹空いたわ。」

鈴花は玄関のドアを開けて、ハルと一緒に中に入ろうとする。そこでふと振り返る。宗太は何も言わず彼女の家を見ている。

「どうしたの。入らないの。」

宗太は鈴花の声に我に返ると、玄関に居る彼女を見た。宗太は彼女の家に入ったことが無いらしい。知っている相手の家だけに入りづらいのかもしれない。

「入りたくなければ、好きにすればいいわ。」

鈴花は宗太にそれだけ言うと玄関のドアをしめようとした。彼女がドアを締め切る前に宗太の手がドアを掴む。彼はドアを開けて体を家の中に入れてきた。彼が家に入ると天井につるされた照明に驚く。

「なんで、灯りが。電気なんて通っていないはずなのに。」

その点について鈴花は宗太に説明する。これもハルと黒い本の力

である。
鈴花が周りを見る。どこをどう見ても先ほどまで水に浸かっていたとは思えない。水に見えて水じゃなかったのだ。
鈴花はリビングに入り、ソファにダイブした。目を瞑り、ゆっくり息を吐く。ハルの声を聞くと、ハルは宗太を彼女の反対側のソファに座らせたらしい。その後、ハル自身は食事を作るために台所に行ったようだ。
「荒谷さんの家なのに彼女は居ないんだね。彼女も他の人たちと一緒に消えちゃったのかな。」
鈴花は目を開けて、宗太を見た。
「ねえ、彼女と宗太の関係って何なの。それと、消えちゃったってどういうこと。」
宗太は少し考えるそぶりを見せた後口を開いた。まず、彼とこの世界の彼女は友達同士らしい。それは彼の言葉を信じればの話である。
宗太は次に、この世界の人々が消えた理由を話し始めた。ある日、空に白い巨大な円が現れて、そこから巨大な生物が出てきたという。それらは人々を次々に殺していったらしい。彼自身はその中を必死に逃げ回り続けたようだ。気が付けば、自分以外誰も居なくなり、生き延びた人を探して動き回っていたところを彼女たちに助けられたらしい。
「自分だけじゃなく、荒谷さんも一緒に連れて逃げればよかったのに。」
宗太は鈴花の言葉に少し声を荒げる。声に気づいてハルがリビングを覗いてきたが、彼女はなんでもないと言って返した。宗太は落ち着くと、彼女を見た。
「僕だって一緒に逃げたかった。あいつらが現れたとき、彼女を探しにこの家に向かったよ。だけど、敵が僕の目の前に現れたんだ。なんとか避けて向かおうとしたけど無理だった。だから、僕は諦めて逃げたんだ。必死に逃げて、気が付いたら誰も居なくなっていた

んだ。」
鈴花は起き上がり宗太を見る。彼も彼女をじっとみた。先ほどの敵と戦っている中、彼は彼女を見つけたと思ったのだろう。彼が一緒に逃げたかった彼女を。
「飯が出来たぞ。」
ハルの声で二人はダイニングに向かう。テーブルの上にあるのは素麺。昨日とは違って麺はザルに、汁は小さな器に入っている。三人は椅子に座り、挨拶をすると食べ始めた。二日連続素麺であるがわがままは言えない。食事らしい食事が出来るだけ良しとしたほうが良い。三人は食事を食べ終わると、ハルは食器の片付けを始める。鈴花が手伝おうかと尋ねるも、休んでいろと言うだけだ。彼女と宗太はリビングのソファに座る。お互い何も言わず、結果彼女は横になって目を瞑った。
「隣座るぞ。」
気が付けば鈴花の隣にハルが居た。彼女はそれを確認すると再び横になる。ただ、今は休みたいと思った。もうあんなことはしたくない。まるで自分自身が単純な計算機になったような気分。そう、計算機みたいな。だけど、それをしないと私は元の世界に帰れない。良く分からないしやりたくないけどするしかないのである。彼女は起き上がり、頭を軽く掻く。
「勉強するわ。ハル映しといて、問題。歯磨いて紙とペンを取ってくる。」
鈴花は立ち上がり、洗面所にて歯磨きをすると二階に紙とペンを取りに行く。彼女の部屋は朝のままだった。水から急いで逃げたままである。彼女は紙とペンを掴むとそのまま一階のリビングへと戻った。
しばらく続くペンが紙の上を滑る音。鈴花が宗太を見れば、実に暇そうにしている。
「家の中を探して面白そうなものを探してくれれば。だけど、私が使っている部屋は入らないで欲しいわ。彼女の物があるし。」

宗太はゆっくりと立ち上がる。彼は鈴花から彼女が使っている部屋の場所を教えてもらうとリビングを出ていった。彼女はそれを確認すると再びペンを走らせた。

それからどのくらい経ったか分からない。鈴花が顔を上げればいつの間にか目の前に宗太が居た。彼は何処からか持ってきた本を読んでいる。

「おい、こっちを見ろ。」

鈴花はハルの言葉ですぐに勉強を再開する。正直中学数学を数時間、数日ですべてまとめようなんてこと自体が間違っているような気がした。それですべて理解できたというならば彼女が天才か内容が薄いかのどちらかだろう。

変数と定数の入り混じる式をこの世界に来てからずっと見ている。そのためか、何時か夢の中に数式が出てくるのではないかと考えてしまう。彼女は自分が心配になった。

「今日はこれぐらいにしてよ。」

ハルはテーブルに張り付いた鈴花を見て何度か頷く。そして、テレビに映る問題を消した。

それから三人は夕食を済ませ、ハルの映し出す昔話を見る。時間はあっというまに過ぎて、お風呂に入って眠る時間となった。

「お風呂入って寝るわ。服出して。」

鈴花はハルが出した袋を受け取ると宗太を見る。そういえば、彼はどうしたらいいんだろう。彼女はハルを見た。

「ハル。宗太の事をお願い。」

鈴花はそれだけ言うと脱衣所に向かおうとした。彼女はそこで立ち止まり、再度ハルを見る。

「宗太が覗き込もうとしたら縛り付けといて。」

鈴花はそれだけ言うと脱衣所に入る。服を脱ぎ、お湯に触れた。

鈴花にとって良く分からない事だらけである。壁にもたれかかりながらも温かいお湯が体の表面を流れていく。何故、彼女はこんな事をしなきゃいけないんだろう。

「この世界って、何なんだろう。私って何なんだろう。」
そんな言葉がふと鈴花の口から出てくる。正直に思ったことである。なんで彼女がこんなことをしているのだろうか。教えてくれる相手が居ないことが辛い。
鈴花はお風呂から出ると、着替えて脱衣所を出る。すると、宗太が着替えを持って向かってきた。
「ちょうどよかった。」
宗太はそのまま脱衣所に入る。鈴花はそれを確認するとリビングに戻った。
「宗太の着替えってどうしたの。」
ソファに寝転がっていたハルは起き上がり鈴花を見る。
「予想外だからな、この家にある男物の服を探して渡した。次に買い物に行くときはまともな服を買ってやったほうがよさそうだ。」
ハルの言うとおり、宗太が再びリビングに来たときの格好は見るからに中年。多分こっちの鈴花のお父さんの服なのだろう。突然来たのだから仕方がないと言えば仕方が無い。
三人がそれぞれソファに座り、無言の時が流れる。無言に耐えかねたのか、ハルが何かテレビに映すかと言ってきた。しかし、鈴花がそれを止める。これでは戦うか買い物以外はずっと家の中に居るようになってしまう。
「決めた。散歩に行く。」
鈴花は勢い良く立ち上がり、チョークを持っているか確認する。もし、外に出ているときに現れてもこれなら焦らないで済む。正直相手は何時出てくるか分からない。それも察知するのはハルであって彼女では無いのだ。
「おいおい、こんな時間にか。構わないが。」
ハルもソファから立ち上がる。宗太を見れば、彼は座ったまま鈴花を見ている。彼だけ置いていくのはどうかと思う。
「宗太。一緒に行きましょう。」
鈴花は宗太に手を差し伸べる。彼は返事をするとその手を掴んで

立ち上がった。彼女はそれを確認すると玄関へ向かって歩き出す。
その後にハルと宗太が続いた。

第十二話　平和な時間

第十二話　平和な時間

鈴花が玄関のドアを開けると、月の光が辺りを照らしていた。夜のためか涼しい。続いて宗太が靴を履いて出てくる。彼はしきりに自分の着ている服を気にしているが、彼女たちしかいないと考えられるのでそれほど気にすることでも無いと思う。最後にハルが家の中の電気を消して出てきた。

ハルはドアを閉めると鈴花たちの上を飛ぶ。彼女は久しぶりにハルが飛んでいるように感じた。しかし、良く考えれば家の中でも良く飛んでいる。彼女たちの頭上を飛んでいるから「飛んでいる」と感じたのだろう。

鈴花はジャンプしてハルを捕まえようとした。ハルは彼女の手を避けると捕まらないようさらに上昇する。

「ちょっと。卑怯でしょうが。」

鈴花はハルを捕まえようと何度かジャンプしたが諦めた。ハルは彼女が諦めた事を確認するとゆっくりと降りてきた。

「こんな所に突っ立てないでどこか行こうよ。」

鈴花が宗太を見れば、彼は既に歩き出していた。彼女もその隣を歩く。ハルを見れば彼女たちの後方を飛んでいる。

鈴花たちはしばらく歩くと近くにある公園に着いた。大きな木々が月の光から守るように公園を覆っている。覆っていることは構わないが、灯りが無いためか公園の中は真っ暗である。

鈴花はハルに明かりを点けるよう言う。ハルは彼女に面倒だと言いながらも公園の前に立った。すると、すぐに公園内に明かりが灯る。彼女は公園に入りながらハルに礼を言った。

鈴花は夜の公園というのは一人で来るには危ない気がして一度も来たことが無い。公園内は静かで虫一匹さえ居ないと感じた。暑い

時期だというのに蚊も居ないようだ。
鈴花は何か無いかと辺りを見回す。ここに来て何も無ければ家に居るときとあまり変わらないと思った。そこで、近くに砂場を発見する。道具も転がっていてすぐにでも遊べそうだ。
「そうだ。砂遊びしよう。」
鈴花はうれしそうに砂場に走る。砂場に着くと宗太を見た。彼は戸惑う。彼はこの歳で砂遊びなんてと思っているのだろう。彼女は彼に近づき手を掴んだ。
「ほら、いいじゃない。私たち以外見てないんだし。」
宗太はしぶしぶ砂場まで来た。鈴花は砂場に置かれているスコップを彼に渡す。彼女も自らスコップをもって砂場を掘り始めた。特に何かを作るというわけでもなくただ砂場に大きな穴を作っていく。その時、ふと昔実家の砂場で穴を掘って居たことを思い出す。
「俺はその辺に居るからなんかあったら呼んでくれ。」
鈴花は夢中で掘るその合間になんとかハルの声が聞こえた。動作を止めてその声に反応する。ハルがどこかへ行った事を確認すると再び掘り始めた。掘り進めると湿った砂が現れる。手を入れればひんやりと冷たい。
「宗太。ここに手を入れてみて。」
鈴花は宗太に掘った穴に手を入れてみるように言った。彼はスコップを置いて、何かを探るように片手を入れた。すると、彼の表情に変化が起きる。
「冷たくて気持ちいいや。」
宗太は穴から手を引っ込めると自らのスコップで勢いよく掘り始めた。もっと深く掘って冷たさを感じたいのかもしれない。
掘るほどに増える砂の山。鈴花たちは両手が埋まるほどの穴を掘り終えた。それから掘り出した砂を使って山や町を作り出した。小さい頃とやっていることは同じだが、さらに細かく作っていく。奥から彼女たちが掘った穴を繋げた谷、砂の山、余った砂で作った町。砂場一面すべてを使って出来た作品は破壊するには勿体無いものだ

った。
「砂遊びって意外と疲れるわね。」
鈴花は砂場の端に座る。砂や土が少々付くが、雨に濡れているわけではないので払えば大丈夫だ。
宗太も鈴花の様子を見て彼女に近づく。彼は彼女に手を差し伸べた。
「こんな所かな。ほら、そこのベンチに座ろうよ。」
鈴花は宗太の手を取って立ち上がる。彼を見れば何かうれしそうだ。
鈴花たちはベンチに座り、出来上がった砂の作品を眺める。照明が適度に明暗を作り、彼女たちが作った物では無いように感じた。
「どうだいお二人さん。ほれ、お土産だ。」
そこへハルが戻ってくる。ハルの手にはビニール袋。鈴花がそれは何かと問えば、中にあるのはアイスバー。触れればひんやりと冷たい。ハルが黒い本を使って買って来たのだろう。ハルが彼女と宗太の間に座ると、それぞれが袋からアイスを取り出す。彼女は木の棒を持ちアイスの部分を口に含んだ。
「それで、何してたんだ。」
ハルの言葉に鈴花はアイスを口に含みながら砂場を指差した。ハルはアイスをくわえながら砂場を一周する。一周し終えると再び彼女と宗太の間に座った。
「砂遊びか。悪くないな。」
鈴花はハルの言葉に相槌を打ちながらアイスを食べる。彼女は最後の一口を飲み込むと立ち上がり背伸びをした。彼女はそのまま宗太と作った砂の作品を見る。彼女は作品の出来に我ながら上手く出来たと感心した。そうしている間に、ハルと宗太もアイスを食べ終えて彼女の元に来る。
「壊すの勿体無いわ。写真で残したいくらい。」
鈴花は周りを見て次の遊びを探す。見れば近くにブランコがあった。彼女は走りよりブランコに乗る。金属が擦れる音が聞こえてき

た。子供用のためか座るところが低く設置されている。彼女にとっては足が地面にぶつかりやすく面倒だ。それでも彼女はこいだ。すると、宗太もブランコに座って一緒にこぎはじめた。ハルは近くのタイヤ椅子に座って二人を見ている。宗太を見れば同じく彼女を見て笑っている。彼女もそれに釣られて笑顔になった。

その時、鈴花は視界の端でハルが何かを感じ取った事を確認した。すぐにブランコを降りてハルに近づく。宗太もどうしたのかと彼女の後に続く。

「来たみたいだ。」

ハルはすぐに黒い本を鈴花に差し出す。彼女は黒い本を受け取り、本を開いた。ページは自動的にめくれて新しいページになる。そのページにゆっくりと絵が現れ始めた。彼女はポケットに入れたチョークを取り出す。持ってきて良かったと本当に思った。そして、現れる絵をじっと見る。

「あの、僕はどうしたら。」

鈴花は宗太を見る。そういえば、彼が居たのだ。ハルと彼女の二人ならどうにかなるだろうが、彼が居ては色々と面倒である。

「悪いけど、先に家に帰っておいて。」

宗太は鈴花の言葉を拒否する。帰る途中に敵と会ってしまったらどうするんだと言って来た。つまり、一人で帰るのが怖いらしい。仕方なく三人は急いで家に戻ることにした。家までの道のりを三人は走る。絵が現れ始めたということはもうすぐ本体が現れるということだ。彼女は早めに彼を家に戻して戦いに専念したいと思った。

「つ、着いたわ。」

鈴花と宗太は少々息を切らしながら玄関前に到着した。彼女は彼に隠れているようにと言って黒い本を開く。絵は完全に現れていた。その姿はまるで戦車のようだ。それも複数である。

「Ｄｅａｔｈｆｅｒｉａ（デスフェリア）だ。」

鈴花は背後からハルの声が聞こえるものの目の前の絵から目を放すことができない。これまでと違って妙に生々しい敵だ。見たこと

があるからかもしれない。ページがめくれて倒し方が現れ始めた。彼女はそれを確認すると周りを見ようと顔を上げた。

その時、鈴花の体が真横に飛ばされた。直後、背後で爆発音がする。気がつけば、ハルが彼女を抱きしめていた。真横に移動させたのもハルだろう。そして、爆発したのは彼女の家だった。立ち上る煙の中で家は崩れかかり壁のかけらが散乱しているのが見えた。すぐに爆発した場所とは反対側を見る。すると、そこにデスフェリアが居た。その姿は戦車としか言いようが無い。主砲が左右に動き、獲物を探している。照準が合えばすぐに撃ってくるだろう。まともに当たったら体は粉々に砕けて幸せな人生の終りを迎えられないと思った。

「仕方ないな。ほれ、俺の手を掴め。」

鈴花はハルに言われるままに彼の手を握った。すると、彼はその手を掴んだまま勢い良く塀を越えて道路に出る。彼女のすぐ近くを弾が飛んでいく。再び近くで爆発音がした。戦車は人間では無くもっと大きな物が相手じゃないのかと彼女は考えた。

鈴花はハルから手を離すと黒い本を開く。自動的にめくれたページには既に戦い方が現れていた。

「兵器に殺されちゃたまらないわ。」

鈴花はチョークを握り直すと、目の前にある道を走り出した。

第十三話　真夜中の戦争

第十三話　真夜中の戦争

前方の丁字路から現れる戦車。慌てて逃げようとする鈴花。主砲から放たれる弾。空気を切り裂く音。背後で聞こえた爆発音。

鈴花が戦車から逃げて別の道へ出ても、そこには待ち構えたかのように戦車が居る。落ち着いて倒し方を見ることも出来ず。彼女は暗い道を走った。気が付けば街灯は点いておらず、月も雲に隠れてしまっている。

「早く、隠れないと。」

鈴花は近くにあった他人の家の敷地内に入る。無論敵に見つかっているが、塀があるためにそれを破壊しなければ追ってこない。彼女は出来るだけ通りから離れたところに移動した。彼女が隠れた場所は植物の鉢が沢山ある。どれも、最近雨が降っていないためか土が乾いてしまっている。家主が居れば、この植物たちも水不足に悩まされないだろうにと思う。

家か塀を破壊する音はするものの影響は鈴花の位置まで及ばない。通りから何度か弾を撃つ音が聞こえたが、それ以降音は聞こえなくなった。戦車が何処か別の場所に移動したのだろうか。

鈴花は敵が遠ざかった事を確認すると黒い本を見る。自動的にページがめくれて倒し方が書かれたページへと移動した。そこには何時もの通り十個の数式が書かれている。式は一次方程式のようでXを求めればよいようだ。書く場所は……。

「なんで、なんで戦車に書かなきゃいけないのよ。」

倒し方には数式は書かず、代わりに答えを敵本体のどこかに書くようにと書かれていた。数式を書く手間が省けるのは助かるが、危険度が増している。しかし、それでも書かれたことをしなければ終わらない。今回の問題が一次方程式であるため、暗算で答えを出す

ことは容易である。
鈴花は一問目の答えを覚えると、敷地内から道路へと出た。すると、左右に一台ずつ戦車が居た。こちらに気がついてすぐに主砲から弾を飛ばしてくる。彼女は一旦敷地内に戻り、戦車が近づいてくるのを待った。その間に二問目の問題を解いて答えを覚える。何度か復唱していると二台の戦車が近づいてきた。先ほどと同じように敷地内に主砲を入れて目標を探している。
「今だわ。」
鈴花はチョークを握り締めて、戦車の主砲の下にもぐりこむ。答えが書けそうな部分があったため、すぐに書き始めた。戦車は彼女が自らの下に居ることに気がつき、自らを回転させる。彼女はそれにともなって自らも一緒に回転した。回転しながら、もう一台が近づいていることに気づく。すぐにもう一つの答えを目の前の戦車に書き込み。回転の途中で再び他人の家の敷地内に非難した。直後背後で聞こえる爆発音。近づいてきた戦車が撃ったのだと思った。
鈴花は三問目と四問目を見て答えを覚える。二台が近くに居ては前の出入り口からは出られない。
「裏口から出られるかな。」
鈴花は家の裏に回った。そこには道路への出入り口がある。出る前に周りを見ようと道路に首を出したとき、近くで何かが破裂する音がした。反射的に首を引っ込めると目の前で爆発が起きる。とっさに腕で顔を覆うものの何かが腕に襲い掛かる。
鈴花は腕の辺りに痛みを感じたてめに腕を見る。すると、爆発で飛んできた破片が突き刺さっていた。近づいてくる戦車の音。一旦出入り口から見えない位置に逃げた。
「い、痛い。」
鈴花は腕に突き刺さった破片を一つずつ抜いていく。流れ出る血や痛みはやけに生々しくてやっぱり生きているんだと実感した。
「俺が手伝ってやる。」
先ほどまで何も言わずに付いてきたハルは鈴花の腕を持ってゆっ

くりと破片を外していく。彼女は腕の痛みに低く呻く。
すべての破片を取り終わった頃には腕がほとんど赤く染まっていた。鈴花は腕を上げようにも痛みで上手く上げられない。
「じっとしてろ。」
ハルは両手を鈴花の両手首に当てる。ハルが彼女の心臓に向かって手を動かしていくと、何故か痛みは消えていった。血は残ったままだが、止まったようである。彼女はハルが手を離すと、腕を動かしてみた。
「痛くない。大丈夫みたい。」
血に染まったチョークを握りなおし、再度問題を見る。早めに終わらせないと次は命が無いかもしれない。こんなところで死ぬ気は無い。
鈴花は答えを確認すると、勢いよく本を閉めて走り出す。塀から道路を見て戦車がいるか確認した。案の定、先ほどの戦車がうろついている。彼女は戦車が背中を向けた瞬間に出入り口から道路に出た。そのまま戦車に近づく。
「後ろから来たぞ。」
鈴花が振り返ればもう一台近づいていた。前を向けば主砲をこちらに向けようと回転する戦車。主砲を向けられる前にその下を抜けて側面に答えを書く。暇も無いので殴り書きである。戦車の背後に回ると四問目の答えを書いた。
「背後見といて。」
戦車は再度回転せずに前進を始めた。戦車が進む先にはもう一台戦車が居るので彼女も一緒についていく。戦車の幅は道の半分以上を占めている。つまり、二台が通り過ぎることは出来ないはずだ。彼女は本を開き問題を見る。答えが出るとすぐに目の前の戦車に書いた。
鈴花が七問目を書こうとしたとき、目の前の戦車が小さくなっている気がした。それとともに別の戦車が近づいてくる音が聞こえる。そして、二台の戦車がすれ違う。そのとき、やはり戦車が小さくな

っていると感じた。何故であるかを考えている暇は無い。対向車線から向かってきた戦車は鈴花たちを発見すると主砲を向けてきた。彼女はすぐに目の前の戦車に飛び乗り、すれ違う戦車の主砲から逃れる。その状態で七問目の答えを書き込むと、塀に足をかけて別の家に飛び込んだ。すぐに塀から離れて隠れる。爆発音と何かが崩れる音が聴こえてくる。家にそって歩き、庭を見た。

「あれ、何。何なの。」

暗闇の中に見える高い建物。まるで角を生やしたお城のような姿の建物はこの町に存在すること自体異様である。

鈴花はその建物に近づこうと一歩前に進んだ。すると、ハルは彼女の腕を掴み引っ張る。彼女はバランスを崩しながらも家の壁にくっ付いた。直後、目の前にある家の外壁が吹き飛ぶ。つまり、戦車が敷地内に入って撃ってきたのである。彼女は目の前で破壊された壁を見て震える。先ほどの痛みが思い出された。

鈴花はゆっくりと壁から庭を覗き込む。案の定戦車が一台見えた。しかし、見えないところに戦車が何台か居るかもしれない。彼女は残りの問題を見て答えを出そうとする。しかし、残り三問であるためか難しい式になっていた。

「ハルは戦車を見てて。」

ハルは庭に居る戦車と塀を越えた先にある道路を注意深く見ている。

鈴花はハルの行動を確認すると、本を見て家の壁に計算式書いた。幸い家の壁はチョークで文字を書いても分かる程度の色であった。彼女は計算から求めた答えを壁に書いていく。書くという行為は暗算より面倒であるものの、今回の問題では素早く答えを導き出すことが出来た。しかし、最後の問題を解こうとしたとき、ハルが彼女を捕まえた。体が宙に浮かんだ後、近くを熱い塊が素早く通り過ぎた。地上を見れば戦車の主砲がこちらに向けられていた。結果、戦車に見つかってしまったようである。しかも、空に出たために、地上にいるすべての戦車に見えているだろう。もう、こそこそと逃げ

ている暇は無い。
「どれでも良いから戦車に近づいて。」
鈴花は先ほど解いた二問の答えを覚えているうちに書きたかった。忘れてしまってはまた計算しなければならない。ハルは彼女の言葉に応えると、地上に急降下した。地面すれすれまで降下するとまっすぐ戦車に向かっていく。しかし、戦車を真正面から向かっていく形になり彼女は戸惑う。戦車は返り討ちにしようと主砲を彼女たちに向けて撃つ。ハルは彼女を抱えたまま飛んできた弾を避けてさらに戦車に近づく。背後から主砲が撃たれた音がしたが、ハルはそれを確認すると難なくかわした。
鈴花たちが戦車の真横をすり抜けて真後ろにて停止する。彼女はすぐに先ほど解いた問題を殴り書く。彼女が九問目の答えを書こうとしたとき、ハルは彼女を抱えたまま一度戦車から離れた。近くにまた他の戦車が近づいてきたからである。戦車の主砲が彼女たちを向いていないうちに元の位置に戻ると残りの答えを書いた。あと一問である。彼女が本を開いて最後の問題を見ようとしたとき、目の前にいる戦車の主砲が回転して彼女たちに照準を合わせてきた。
「ひとまず逃げるぞ。」
ハルは鈴花を抱えたまますぐそばにある他人の家の敷地内に入る。そのまま敷地内を横切って別の道に出た。道には戦車は見えない。彼女たちがあまりに一箇所に居たために吸い寄せられるようにみんな寄っていってしまったのだろうか。
鈴花が背後を見た後、正面を見ると先ほど見た城が見えた。しかし、何か様子が変である。
「角が、角が無いわ。」
先ほど確かにあった城に生えた角はどこかへ消えてしまっていた。今やただ大きな城がそこに存在するだけである。
鈴花は黒い本を開いて最後の問題を読んだ。ハルが周りに注意を払う中で塀に計算式を書いていく。まるで三桁の割り算を解いているかのような状態は何時かを思い出す。彼女は答えを求めると、頭

に叩き込んだ。今回は塀に書いても意味が無いからだ。
そこへ、鈴花から少し遠い位置から爆発音が聞こえてくる。彼女は聞こえた方向を見ようと体ごと向きを変えようとした。その時、ハルが真正面から彼女にぶつかってきた。そのままハルは彼女を抱えて道を移動しはじめる。ハルの背後から来る赤い弾。先ほどまでの弾とは何か違うような気がした。彼女の体は進行方向とは反対に向いているため、飛んでくる弾を直に見ることとなった。先ほどまでは背後にあったためにそれほど恐怖は無かった。しかし、近づいてくることが分かる今となっては迫りくる恐怖からなんとか逃げようと抗う。
「ハル、速く。」
ハルは無言でスピードを上げる。幾つかの角を曲がり、相当な距離を移動してもまだ追いかけてきた。
「なんで追いかけてくるのよ。角を曲がる弾なんてまるで誘導ミサイルじゃないの。」
鈴花はそこで口を抑える。後ろ向きに凄いスピードで移動しているためか気持ち悪くなってきた。
「おい、大丈夫か。」
ハルの言葉に顔を上げると、赤い弾が先ほどよりも近づいてきていた。鈴花は言葉が出ず、唸るだけしかできない。異変に気が付いて振り返るハル。その時、突如赤い弾が破裂した。それを確認したハルはすぐに目の前でゴムのような液体に変化して彼女の体を覆う。
直後、爆発の煙の中から鈴花たちを襲う小さな破片。それは、彼女を覆うハルの体に突き刺さっていく。
煙が晴れたとき、鈴花たちは地上に立っていた。彼女から剥がれ落ちるハル。それは一瞬ハルではないのではないかと思うほどの姿だ。無数の破片が食い込んでいる。彼女は自分の体を確かめた。痛いところは無い。全部、ハルが受け止めてくれたのだ。彼女はしゃがみこんでハルに触ろうとする。
「ハル、ねえハルってば。」

鈴花はハルが再び元の姿に戻って動き出すことを心の中で思いながらも、多くはもう二度と動き出さないだろうという思いが心の中を占めていく。もう動き出さないと思えば思うほど、空へ向かって泣き叫びたくなる。

その時、背後から聞こえる戦車の音。鈴花はチョークを握り締め立ち上がる。ここに留まることはできない。まだ、彼女にはするべきことがある。すぐに近くにある他人の敷地内に入り、塀を挟んだ位置から戦車を見た。

戦車は鈴花に気づき、主砲を向けてくる。彼女はすぐに塀から離れた。直後、主砲から撃たれた弾が塀を破壊する。戦車は一部破壊された塀に向かって再度主砲を撃つ。広く破壊された部分から戦車は侵攻してきた。

鈴花はそれを確認すると塀をよじ登り道路に出る。そのまま戦車へ背後から飛び乗った。戦車は気が付き主砲を回転させるが、彼女が戦車に乗っているため撃ちようにも撃てない。

鈴花は覚えておいた最後の問題をチョークで書き込むと回転する主砲を見る。主砲が塀とは反対を向いたとき、彼女は塀に向かってジャンプした。塀に片足をかけると、そこからさらにジャンプして他人の家の敷地内へと飛び込む。

鈴花は着地すると黒い本を開きながら移動を開始した。本を見ればすべての数式が青白く光る。その後、すべてのすべきことが順に光ると最後にすべきことが浮かびあかがった。

「そ、そんな。出来るわけ無いでしょ。」

最後にすべきことを見た鈴花は立ち止まり、思わず大声を出してしまった。それほど面倒なことなのだ。最後にすべきこと。それは、先ほど見た城の一番上にこの本を置くこと。ハルが居れば飛んでいけるだろうが、彼女一人で幾つもの戦車が居る中を通って行くのは難しい。

「どうすれば良いの。ハル。」

鈴花は黒い本を見る。すると自動的にページがめくれて、あるペ

ージを開いた。右のページには何も書かれておらず、左のページにハルらしき生物が書かれている。すると、絵が光だし、絵の中から立体的な物体が浮かび上がってきた。彼女は予想外の出来事に驚き黒い本を地面に落としてしまう。光るページ、その中から現れる物体。完全に本から離れたそれはハルそのものだった。

「ハル、どうして。どうしてそこに居るの。」

先ほどまで一緒に居たハルは目の前でゴムのような姿になって動かなくなってしまった。では、今目の前に居るハルはなんなのだろうか。ハルが黒い本から出ると、光は収まり、本は自動的に閉じられた。

「おう、鈴花。大丈夫か。」

鈴花からすれば口調も今まで通りのような気がした。特に変わりないが、先ほどの状態からか違和感を感じる。それをハルに問えば、驚くべき返答が帰ってくる。

「俺はさっきのハルじゃない。」

先ほどのハルでは無いということは今目の前に居るハルはまた別のハル。だけど同じ姿と口調。鈴花は現状が良く分からなくなった。

「まだ、倒してないんだろ。さっさと倒すぞ。」

ハルは鈴花を抱えると移動を始めた。目的地を伝えると知っているようだった。先ほどまで黒い本の中に居た。その事実がハルが目的地を知っている理由になるような気がした。

鈴花はハルの移動スピードが速いためか、顔面にぶつかる風によって目を開け切ることが出来ない。薄目でみる世界の中で、敵が撃つ弾を避けながら飛んでいることだけは分かった。彼女は黒い本を両手でしっかりと抱きしめる。

鈴花が薄目からしっかりと目を開けようとしたとき、目の前に数台の戦車が見えた。その奥には目的地である城が見える。

次の瞬間、各戦車がほぼ同時に主砲を撃ってきた。ハルはその弾の軍団の中を器用に避けながら抜ける。そのまま城へと向かうと、城の周りに幾つもの対空砲が現れた。もちろん、鈴花たちを打ち落

とすためである。すべての対空砲が目標を捕らえ弾を撃ち出す。誘導式のためか彼女たちからなかなか離れない。ハルは沢山の弾を避けることに必死で城の一番上に到達することが出来ない。

城を上から見ると、平らな円形になっている。まるで先ほどまで何かあったかのように平らで何も無い。

「二人揃っては無理だ。お前だけ行け。」

ハルはスピードを上げて一気に城の一番上に近づく。急激にスピードを落とすと共に、その反動で鈴花を城の一番上にある円形部分に放り投げた。彼女は投げ出され硬い床の上を転がる。

「い、痛い。何で出来てんのよこれ。」

鈴花は痛めた部分を片手でさすりながら、もう片方で床を叩いた。何で出来ているかわからないが硬いことは分かった。周囲を見ればハルが今も弾に追いかけられている。ここには弾は向かってこないようだ。

鈴花は手に持っている黒い本を円形の中心に置いた。彼女は立ち上がりその後の展開を待つ。黒い本の表紙にある模様が一瞬光ると、本自体が光りだした。あまりに強い光のためか彼女は本を見ることが出来なくなった。光が収まったとき、周りを飛んでいた弾は消えていた。

「うまくいったみたいだな。」

ハルが鈴花の元に来る。彼女は頷き本を見た。すると、本は床の中にゆっくりと沈んでいった。直後まるで地震でも起きたかのように大きな揺れが起きる。彼女はハルにつかまって城から離れた。

鈴花が上空から城を見れば、城の周りに増える戦車の数。城は戦車を吸い寄せ交わり自らも小さくなっていく。遂には自らが存在する土地よりも小さくなりやがて消えてしまった。

鈴花たちは城があった場所に降り立つ。何も無い更地。周りの建物がえぐられているといった中途半端な影響は無く、更地になった場所にかつて存在したであろう建物だけが消えてなくなっている。そして、黒い本が宙に浮いたまま現れた。

鈴花は黒い本を取り、本を開いた。デスフェリアのページに移動すると何時もの通り赤文字が浮かび上がる。倒せたということだ。彼女はチョークをしまうとハルを見た。

「帰りましょう。宗太も見つけないと。」

ハルは鈴花の言葉に応える。そして、彼女を抱えると彼女の家へ向かった。

東の空が明るくなり始めていた。夜を越えてもう朝になるのだ。上空から見える町は所々破壊されていた。それらは鈴花と敵が戦った場所だ。

鈴花はもう少し破壊せずに終わらせることが出来なかったのかと自問する。知っている町並みだからだろう。昨日まであったものが突然消えるのは悲しい。

第十四話　短い休息

第十四話　短い休息

鈴花たちは彼女の家に到着する。とは言っても、家は敵に破壊されて見るも無残な姿になっている。中に入れるかも怪しい状態だ。

「もう、住めないなこりゃ。」

ハルは鈴花を見る。そして、再度家を見た。

「俺が中に入って必要なものを取って来てやる。何か必要なものは。」

ハルの言葉に鈴花は彼女の部屋にあるものを口に出して並べていった。これから必要そうなもの。そこで、ふと写真の事を思い出すとポケットの中に手を入れていく。すると、昨日から入れたままの写真があった。面倒なので着替えた服に入れておいたのだ。

「それだけか。じゃあ、宗太を探しといてくれ。」

ハルの言葉に鈴花は頷く。ハルは家の中に、彼女は宗太を探し始めた。彼女たち以外に自ら音を発するものは無いため、声を出せば遠くまで広がっていく。

「おーい。ここだよ。」

少し遠くから声が聞こえてきた。明らかに宗太の声である。鈴花が声のする方向へ走ると、彼がこちらに駆けて来るのが見えた。彼女の前で立ち止まり荒い呼吸を整えようとする。顔は下がり、少々辛そうだ。

「無事だったみたいね。良かった。」

鈴花の言葉に宗太は顔を上げて頷いた。

「荒谷さんも。無事で良かった。」

鈴花はその姿を確認すると頷き、彼女の家のほうを向く。そして、振り返り宗太を見た。

「家に戻りましょう。早く寝たいわ。」

鈴花と宗太は並んで彼女の家への道を歩いた。彼は敵が現れたとき、しばらくはその場に隠れていたが、近くに敵が寄ってきたために別の場所に移動したらしい。いくつか敵と出合ったらしいが、どうにか攻撃を受けずに逃げたそうだ。実際のところ敵から見たら彼女が目標だと思うので彼を積極的に追いかけないのかもしれない。

鈴花たちが家に着くと、ハルは庭に座って家を見ていた。

「おう、二人とも大丈夫だったか。」

ハルの言葉に鈴花と宗太はそれぞれ頷く。ハルはそれを確認すると、立ち上がり二人を見た。そして、家を指差す。

「ご覧の通りこの有様だ。もう住めないだろう。」

鈴花の住んでいた家は傾き、今にも音を立てて崩れ落ちそうな状態である。中で眠れば起きる前に家の下敷きになっているもしれない。ハルはいつの間にか上空に上り、周りを見渡している。そして、彼女の元に戻ってきた。

「この町も破壊されてきている。もうここを離れて別の場所に行ったほうが良さそうだ。」

鈴花は周囲を見る。これまで住んでいた家にはもう住めない。それにこの町も所々破壊されている。

鈴花が別の場所とは例えばどこかとハルに尋ねる。

「ここからだと東京かな。あそこはここよりも色々なものが揃う。」

他に移動する先を考えていないためか、鈴花はハルの提案を採用した。東京ということは移動手段は電車だろうか。

「そうか。ここを離れて移動するんだね。」

宗太を見れば道路に出て辺りを見回している。自分の育った町だから、離れたくないのかもしれない。彼女は宗太の言葉からそんな答えを導き出した。

「家が壊れたんだから仕方ないだろ。」

宗太の言葉にハルが対応する。実際のところまだこの町に残ることは出来る。しかし、住んで居た家が壊れたことでこれ以上この町で戦う理由が無くなってしまった。それにこれ以上この町が破壊さ

れるのも気分が悪い。
鈴花はあくびをしながら両腕を思いっきり空に向けて背伸びをする。まだ睡眠をとっていないためか眠い。
「東京に移動する前に駅前のホテルで休むか。」
ハルの提案で駅前のホテルに泊まることにした。朝からチェックインなどどうやって出来るのかと思う。しかし、ハルの提案なので何かあるのだろうと思って三人は駅前へと向かった。
駅が目の前に見えるホテルは外見に比べて建物内は意外と綺麗で広い。黒い本は何時ものとおりホテル内に存在するスタッフや客人たちを映し出す。動きが嫌に生々しくて本当に居るように錯覚してしまう。宗太を見ればパジャマ姿のためか周囲の視線を気にしている。相手が生身の人間では無いことがせめてもの救いだろう。
フロントに聞けば泊まることが出来るらしい。鈴花とハルで一部屋、宗太一人で一部屋を使うことになった。彼女は三人それぞれの部屋が良いのではと提案する。しかし、ハルはそれを拒否して彼女と一緒の部屋にするように言って来た。ハルがそばにいればすぐに黒い本を取り出すことが出来る。だから、ハルは彼女と一緒の部屋のほうが良いのかもしれない。
「それじゃあ。三時にロビーに集まりましょう。」
鈴花の声でそれぞれが自分の部屋へと入る。彼女は部屋のベッドに倒れたい衝動を抑えつつハルから着替えを受け取ってシャワーを浴びた。眠いためか立って居ることが出来ず、その場に座り込む。すると、誰かが部屋に入ってくる音が聞こえてきた。ハルと話をしているので宗太だろう。服が無いとかそういう話かもしれない。着替えて部屋に戻ると、ハルがベッドの上に座っていた。
「東京に行く前に宗太に服を買うことにした。ホテルを出たら前回鈴花と一緒に行った店に行こう。」
前回行った店は今居るホテルから駅をはさんだ反対側にある。東京へ向かう電車にパジャマを着て乗るのはさすがに辛いのかもしれない。

鈴花はカーテンを開けると、先ほど出来なかったベッドへのダイブを実行する。そして、やわらかい感触を肌で感じながら夢の中へと入っていった。

鈴花が目覚めたのは強い日差しを感じた午後だった。隣を見ればハルがベッドに寝転がり天井を見ている。ハルは彼女が起きたことを確認すると、起き上がった。

「起こす手間が省けたな。ちょうど午後二時半を過ぎたところだ。」

鈴花は起き上がり、洗顔や歯磨きをこなしていく。

鈴花とハルは準備を終えるとロビーへと向かった。朝と同様にスタッフや見知らぬ客人がそれぞれの行動をしている。

鈴花とハルは空いている椅子に座って宗太を待つ。しばらくして宗太が来た。変わらずパジャマ姿だ。

「飯でも食おう。昨日の夜から何も食ってないだろ。」

鈴花はハルの言葉にいまさら空腹を思い出す。眠かったためか忘れていたのだ。

ハルは椅子から立つと歩き出した。鈴花と宗太もその後に続く。着いた先はホテル内のレストラン。彼女はハルに導かれるままにレストランの中に入る。そして、三人で一つのテーブルについた。すると、ウェイターがメニューを持って登場する。

鈴花はメニューを開いてもどれが食べたいとも思わない。しかし、食べないことには空腹は満たせず動くことが出来ない。しかし、選べない。

「ハルに任せるわ。」

鈴花はハルにメニューを渡す。ハルはメニューを見ながら料理名をウェイターに告げていく。結果、宗太も同じく食べたいものを言わなかったためにハルの独断で料理が選ばれた。

ウェイターはすべての注文を復唱するとその場を離れて厨房へと下がる。周りには鈴花たち以外居ないため、まるで貸切のように思

えた。
　しばらくの後にウェイターの手によって料理がテーブルの上に並べられていく。その量は三人には多いような気がした。少なくとも鈴花からみれば多いような気がした。
「よし、食べるぞ。いただき……あれ。」
　鈴花はハルの声に彼を見る。しかし、すぐに目の前の料理に視線を元に戻した。
「鈴花は最近軽いものしか食ってないだろ。だから、戦いから帰ってくると何時もぐったりしてんだよ。」
　ハルはそこで彼の目の前にある料理を取って鈴花の前に差し出した。料理はご飯もののようだ。しかし、彼女はなかなか受け取らない。
「さっさと受け取って食え。食わなきゃ死ぬ、食っても死ぬ。だったら食って死んだほうが良いだろ。」
　鈴花はハルから皿を受け取る。目の前に見える料理の山。以前このぐらいの量の料理なら食べたことがある。そのときはしっかり食べていたような気がする。その時と今と、何が違うんだろう。
　鈴花は皿にのった料理を一口食べた。すると、まるでまだ何も食べていないような感覚になる。彼女はもう一口食べる。彼女の食べたものが底の無い胃袋に落ちていくような気がした。彼女は底の無い胃袋を完全に満たすようにゆっくりと食べ進める。彼女の姿を見たハルや宗太もそれぞれ食事を始めた。
　ハルが頼んだ料理の山は次第に崩れ始め、遂には新しい料理の山を呼ぶことになってしまった。
　テーブルから皿が無くなると、三人はそれぞれ膨らんだお腹をさする。鈴花にとっては久しぶりにいっぱい食べたような気がした。
「さてと、払ったら次は買い物に行こう。」
　ハルが席を立つと、つられて他の二人も席を立つ。レストランの勘定とホテルのチェックアウトを済ませてホテルから出た。そこで鈴花は先ほどまで居たホテルを見る。すると、明かり一つ無い建物

がそこにあった。
「ほら、行くぞ。」
鈴花はハルの声に応えると、ハルと宗太の横に並んで歩いた。駅を越えて一昨日訪れた専門店へと入る。すると、あの時と同様に人々が現れた。
鈴花は店内のカフェで一人お茶を飲む。宗太は男物のコーナーをハルと回って色々買っている。彼女が一緒に居たからといって何かアドバイスできるわけでもなく、彼自身も彼女の同行を嫌がったので付いていかなかった。彼女は周りを見る。他にもお茶を飲んでいる人が何人か居た。中には仕事をしている人も居る。本当に忙しそうだ。彼女はこんな状況まで再現しなくてもと思った。
しばらくしてハルと宗太が戻ってきた。動きやすそうな短パンにTシャツ。鈴花とは男物か女物かの違いだけだ。
「さてと、準備も出来たし、東京に行くか。」
三人は店を出て駅構内へと入る。ここでも人々が行き来している。鈴花はハルを見る。
「東京までの切符を買わないと。」
鈴花たちは券売機で切符を買う。彼女はハルをどれに区分するか少し迷ったが、大人と考えて購入した。改札機に切符を通すと階段を下りてホームへ出る。周りに何人か電車を待つ人が居る。ここまで再現しなくてもと思った。
しばらくして電車が来る。鈴花たちはそれに乗ってよく知る町から東京へと移動を開始した。乗客は時間帯のためかまばらで簡単に座ることが出来た。そこから外の景色をじっと見る。彼女は特にすることもなくただただ景色を見た。彼女が見る外の景色には人一人居ない。ハルは当たり前だと言うが、それでも本当にみんな居ないんだと彼女は思った。映っているはずのTVスクリーンは何も映さず真っ黒い。見る人間も映す人間も居ないのだから仕方ないと思う。
鈴花は外から目を離して深呼吸する。朝寝たためか体がおかしい。彼女は目を閉じて到着するまで待った。

鈴花たちは東京に到着すると、電車を降りてエスカレーターと階段を含んだ長い道のりを歩いた。駅構内は表示しなくても良いほど人は溢れ、ごちゃごちゃして気持ち悪い。彼女たちは駅を出るも、先をどうするかは考えて居ない。そこで彼女はまっすぐ西へと歩き出す。それにつられてハルと宗太も歩き出した。車も人も居ない広い道路を歩く。歩き続けると皇居が見えた。

「生まれて二度目だわ。まあ、それだけ。」

鈴花が再び歩き出そうとしたとき、ハルが彼女を抱えて上昇を始めた。地面が遠のいていく。

「見てみな。」

地面ばかりを見ていた鈴花は、そこで上空から皇居を見ることが出来た。写真では無く自らの目で。ハルの足につかまっている宗太は感嘆の声を上げる。それからぐるりとハルは回転する。すると、南方向に東京タワーが見えた。

「せっかくだから港の赤い塔へ行こうよ。」

鈴花は何時敵が来るか、何時終わるか分からない。だから、出来ることは今のうちにしておきたかった。だって、こんな状況はもうこの先無いだろうから。

鈴花たちは地上に戻ると東京タワー目指して移動を開始した。東京タワーに到着したときには少し薄暗くなり、夜が近いことを感じる。彼女たちはエレベーターで展望台へと入った。せっかくなのでハルが特別展望台も見られるようにしてくれた。それに他の客は表示させず必要な人だけ表示させている。貸切みたいでちょっと贅沢な気分になった。

鈴花は展望台に上ると、周りを見渡した。

「荒谷さん。すごいところに立ってるね。」

鈴花は宗太の声で床をみる。直後彼女の背中に嫌なものが走った。床が透けて真下が見えているのだ。これはどう見ても反則技な気がした。彼女はゆっくりと透けている床から離れた。宗太が彼女のそんな姿を見て笑っている。彼女たちは二階に上がり一階との差を比

べ、特別展望台へとさらに上がる。地上を見れば足がすくむほどの高さ。高いところが好きなら良いと思うが、こんなに高いと怖い。この高さから落ちたら命が無いと想像するからだ。外は暗くなり、真っ暗な世界で星だけが光っている。

「真っ暗だ。ただ星だけが光っている。」

宗太は窓に張り付いて見ている。その隣に鈴花は並ぶ。そして窓に手を触れた。

「また、安心して星が見られる世界が来れば良いわね。」

鈴花の声に宗太はこちらを見たがすぐにまた前を向いた。

鈴花は離れて背後に居るハルに近づく。彼の表情に彼女は歩みを止めた。彼は黒い本を素早く取り出すと彼女に差し出した。

「敵さんが来たぞ。」

ハルは鈴花を見る。彼女は本を受け取りゆっくりと開いた。開いたページにゆっくりと絵が表示されていく。

「なんだあれ。」

宗太の声に鈴花とハルは彼が見る方向を見た。地平線の辺りが白く光りだしている。その白い部分は徐々に大きくなっているように見える。彼女が再度本を見ると絵は表示され、情報が表示された。絵はただただ白いもやが描かれているだけである。

「ｂｌａｎｋ（ブランク）だ。」

鈴花は本から目を離すと地平線に見える敵を見た。先ほどよりも明らかに白い部分が多くなっている。

「すべてを真っ白にしようっていうの。」

鈴花はエレベーターに向かって走り出した。

敵は世界を白く染める。出来上がるのは、昼も夜もない世界。

第十五話　白い世界の中で

第十五話　白い世界の中で

鈴花がエレベーターに乗り込むとハルと宗太も乗り込んだ。一階に着くと薄暗く誰も居ない。敵が現れたために表示されなくなったのだろう。彼女たちはすぐに外に出る。今は夜なのに何故か明るい。見上げれば白に染まった空が見えた。

「ハル。空に上るよ。宗太も一緒に。」

ハルは鈴花を後ろから抱え、宗太はハルの足を持つ。彼女たちは高いビルを越えて空高く上る。建物よりも高い位置まで来ると、周囲が良く見渡せた。すると、遠くからこちらに移動してくる十個の白い物体が見えた。それらは彼女を囲むように向かってくる。それらの物体から地上へと何度も細い光線が出されている。何なのかはわからない。しかし、良くないことだけは分かった。

鈴花は黒い本のページを見た。すると、すべきことが表示される。問題は二元連立方程式が十問。何時もの通り式と答えを書けという事らしい。一問に二式なので半分にして欲しいぐらいである。書き込む場所は地面であって床では無い。地面に書くなら書きやすい道路が良い。

「地面に書けって。ハル、すぐに降ろして。」

鈴花の言葉でハルは地面に降りる。彼女はハルから離れると、チョークを取り出して問題を地面に書き写した。二元連立方程式は解き方として代入法や加減法がある。分数にならない式ならば代入法のほうが計算時間は少ないはずだと彼女は思った。ざらざらした道路の真ん中でチョークが音を立てて削れていく。

「な、なんだこりゃ。」

鈴花がハルの声に周りを見れば建物や地面が真っ白くなっている。白く染まった建物と地面の境界はあいまいでまるで一つの物体のよ

うに見えた。そして、その上から現れた敵。丸く白い物体。彼女はそれを見ると今解いている問題を急いで解き終えようとする。
「逃げるぞ。」
ハルの声が聞こえた直後、体を掴まれて別の場所に移動していた。元居た場所を見れば地面が白くなっている。まるで白いペンキを撒いたような状態である。その中でも一部地面が見えていた。そこは先ほど自分が式と答え書いた場所である。
鈴花はすぐに周りを見る。遠くに見えていた丸く白い物体。それらが細い光線を放ちながら彼女たちに向かってくる。よく見れば物体から出る細い光線は当たった場所を白く染めるようだ。
「と、とりあえず逃げないと。」
鈴花はハルに体を掴まれたまま自分だけ白い物体から遠ざかろうとする。すると、体に衝撃が走った。すぐにその場から離れる。よく見れば白く染まった部分に触れていたらしい。
「なんなのこれ。白い部分に触れられないわ。」
そこで鈴花は思い出す。この白い部分はヴェニスの水と同じものなのかもしれない。だとしたら、かなり厄介なものだ。
「白い部分を避ければいいんだろ。行くぞ。」
ハルが動くことによって実際に遠ざかることが出来た。敵とほぼ同じ高さまで上昇する。そして改めて敵を見た。数えてみれば九体で、一体はどこかへ行ってしまった。九体すべてがこちらに向かって近づいてくる。
「こんな沢山の敵が居る中で、どうやって倒せって言うの。」
鈴花はどうしようかと考える。この数の中で地面に降りれば囲まれて自分も白く染められてしまうだろう。染まったらどうなるのだろうか。良いことはなさそうだ。
「僕がやつらの注意を引く。その間に倒すんだ。」
鈴花は宗太の言葉に自分の耳を疑う。
「あなたが注意を引くって。相手は私なのよ。あなたじゃ無理よ。」
鈴花がそう言うも、宗太は聞かなかった。ただただ彼女とハルに

くっ付いているのが嫌なのかもしれない。それにここは彼の住む世界だ。こうやって何も無い白い世界にされていくのが嫌なのかもしれない。

「わかったわ。宗太を降ろして。」

鈴花の言葉でハルは地面へとすばやく降りる。宗太は地面に足が付くと鈴花たちから離れた。

宗太は鈴花とハルから離れると走り出す。彼女とハルは上空に上ると宗太とは別の方向へと移動を開始した。敵を見ずにひたすら突き進む。しばらくして背後を見ると、四体の敵が見える。半分はまた別の方向へ移動しているのかもしれない。宗太が本当に引きつけたのだろうか。

鈴花ははすぐに地面に降りて、問題と答えを書き始める。ハルは敵を見ていると言って彼女の背後についた。

焦る気持ちが脳を高速に回転させる。頭が熱くなるのを感じながら二問を解き終えた。

「離れるぞ。」

鈴花はハルに背後から掴まれて上空へと上る。彼女が背後を見ればすぐ傍まで白い物体が近づいていた。よく見れば二体に減っている。そこで彼女は考えた。問題を解いた数だけ敵が消えていくのではないか。だとしたらすべて解けば全部消える。早く終わらせなければ。

鈴花たちはさらに別の方向へ移動を始めた。すると、目の前に白く染められた地区が現れた。既に敵に染められているらしい。他の方向に行こうにも、同じく染まっていて行くことが出来ない。二人は白く染められた地区の手前で降りた。

「鈴花は書いてろ。俺は逃げ道を探す。」

ぐるぐると辺りを回るハルを背後に鈴花は地面に問題と答えを書いた。彼女は自分の呼吸が荒くなっている事に気付くが気にしないことにした。気にしたところで何も変わらない。

「来たぞ。書き終えたか。」

鈴花が最後の一文字を書いた後、敵を見ると二体のうち一体がその場で消滅した。やはり問題を解けば消えていくのだ。ハルに掴まって上空へとあがる。そして、ハルはまだ白く染まっていない部分に突入した。つまり、敵が居る方向である。

「ちょ、ちょっとどうする気よ。」

ハルは鈴花の言葉を聞かずに降下する。そして、建物の間に伸びる道を飛ぶ。彼女はその間に次の問題を見た。地面をさがしてからでは時間が勿体無い。頭で解ける分は解こうと考える。

上空に見える敵。放射される細い光線。白く染まる地面や建物。ハルは無理やり光線を避ける。振り回される鈴花はハルから落ちないようにしっかりと掴まった。ある地点まで行くとハルは速度を落として地面へと降りた。

「嘘だろ。この辺はさっき……。」

ハルは目の前の状況に驚愕する。それを尻目に鈴花は問題を解く。一問書けば今追いかけて来た一体は倒せるはずだ。

「鈴花速く書くんだ。このままだと俺たち動け無くなるぞ。」

ハルの言葉が鈴花に襲い掛かる。白で囲まれたらおしまいだ。まるでリバーシのようである。彼女は頭が痛くなるが気にしない。無理してでも終わらせないといけないのだ。

すると、先ほどの敵が現れた。鈴花は敵を見る。その敵から細い光線が放たれた。放たれた先は彼女が数式を書いた部分である。光線が到達した部分がゆっくりと液体が染み込むように白くなっていく。彼女は殴り書きで答えを最後まで書き終えた。そして、彼女はその場から離れようとする。しかし、急な吐き気に立ち止まる。ハルは彼女を背後から掴んで離れた位置に避難させた。

鈴花は先ほど書いた式を見る。一部少し白くなっているところに問題と答えを書いてしまったが、その部分はすぐに白さがなくなり元の色に戻った。そして、目の前の敵は消える。彼女は大きく息を吐いてその場に力なく座る。あと半分である。この敵でおしまいなのだろうか。それに値する凶悪さを持ち合わせている。

「残り五問。終わらせましょう。」
鈴花は息を整えるとハルを見た。ハルは彼女を抱えると白く染まっていない部分を選んで移動する。しかし、すぐに先に進めないことに気がつく。
「駄目だ。どうしようもない。」
ハルはひどく落胆する。そして、その場に下りた。
鈴花はここで書くしかないと思って本の問題を見る。すると、一問増えていた。その式は赤く光っている。彼女はすぐに地面にその問題と答えを書く。
「嘘だろ。元の建物に戻っていく。」
ハルの言うとおり周りの建物が白から元の色に戻っていった。鈴花は再度本を見る。すると、赤く表示された式は消えて代わりに残り時間が表示されていた。
「残り時間ってどういうこと。」
それを聞いたハルはすぐに鈴花を抱えて移動を開始する。彼女が残り時間の上の行を見ると、内容が理解できた。
「五分間だけ正常な世界に戻すって。」
鈴花はそこで考えた。五分で五問。なんとか解けるんじゃないだろうか。彼女はすぐにハルに言って先ほど居た地面に降ろしてもらった。そして問題を見て書き始める。既に残り時間が四分近い。この時間に終わらせればこちらの勝ちだ。
しばらくして彼女は何か気配を感じる。しかし、気にしないで書き続けた。今はそんなことに気を配っていられない。
「残りが来たぞ。早く答えを書いてくれ」
鈴花はハルの声で一瞬見上げる。すると、残り五体が彼女とハルを囲んでいる。宗太は居ない。そして彼がひきつけた残り五体が何もせず彼女を囲んでいる。彼女は彼の最悪の事態を考えたとき、体の中で何かが爆発した。
「ふざけんじゃないわよ。」
鈴花は地面に言葉を叩き付ける。そして、彼女は叫びわめき散ら

す。その姿にハルは戸惑い止めようとする。しかし、半端な力では彼女を抑えられない。彼は彼女の肩をしっかり持って目を見た。
「鈴花しっかりしろ。書かなきゃ終りだ。終りなんだよ。」
ハルの言葉で鈴花は少しずつ落ち着いてくる。そして、鈴花は濡れた瞳で再び問題を解き始めた。体の中にどうしようも無い怒りを抱えて。
鈴花が最後の問題を見たとき、残り三十秒だった。彼女はなんとしても時間内に終わらせるべく問題を解き始める。体から汗が噴出す感覚を味わいながら片方の変数を出す。
「まずい。元に戻り始めたぞ。」
鈴花はハルの声を聞きながら残りの答えを求める。その答えを書いているとき、眼前に敵の細い光線が放たれる。そして、こちらに向かってきた。彼女は最後の答えを素早く書くと横に避ける。そして、敵を見た。すると、最後の一体がゆっくりと消えていく。
鈴花は完全に消えたことを確認すると黒い本を見た。敵の表示されたページが現れて赤い文字が表示される。倒したということだ。そこで彼女は一度深呼吸をするとハルを見た。しかし、彼はうれしそうには見えない。彼が見る先は先ほどと同様に白い世界のままである。彼女はそれについて発言しようと口を開くが声を発する前に彼の声によって遮られた。
「来たみたいだぞ。最後の敵が。」
ハルの言った「最後」という単語が気になった。やっと次の敵が最後であると同時に先ほどの敵が最後ではなかったということだ。
鈴花が黒い本を見れば、ページが自動的にめくれて何時もの通りに敵の情報ページに移動する。そして、敵の絵が表示され始めた。しかし、何か様子が変である。絵は表示されず、代わりに「Ａｃｑｕｉｓｉｔｉｏｎ　ｆａｉｌｕｒｅ」と出る。この文についてハルに聞こうとしたとき、彼は驚きながらある方向を見ていた。
「嘘だろ。どうしてお前が。」
鈴花もすぐにハルが見る方向を見る。すると、その先に見えたの

は宗太だった。
「宗太。無事だったんだね。」
鈴花はうれしくなり近づこうとする。しかし、それをハルが止める。彼女は彼の手を振りほどいて、宗太を見た。
「どういうことよ。良いじゃないの。宗太なんだよ。」
鈴花の言葉に宗太は笑い出す。これまで見たことの無い気持ち悪い笑い方である。その姿に鈴花の体は固まり、動けなくなった。ハルは彼女の手を掴んで自分の隣まで引き戻す。宗太はひとしきり笑うと二人を見た。
「先に断っておくが、私は宗太では無い。」
うつむき上目使いでこちらを見る宗太は明らかに別人に見えた。鈴花は黒い本のページを見る。ハルも同じくページを見ると、宗太を見た。
「奴がｎｕｌｌ（ヌル）だ。」
ヌルと呼ばれた宗太は何度か頷くとこちらを見た。
「正確にはこの宗太という対象に宿る存在を操るのが私であり、この世界そのものなのだ。」
ヌルは良くわからない事を言いながら両手を広げて空を見る。空は今も気持ち悪いほど真っ白いいままだ。そして、ヌルは手を降ろすとこちらを見た。
「ハルよ。君がこの世界の生存者を気安く仲間に入れた事が仇になったな。お前は知っていたはずだ。こいつが感染者であることを。」
鈴花はハルを見る。彼は何も言わずヌルをにらんでいる。彼女はこの状況では「感染者」という言葉について聞くにも聞けないと思った。
「宗太という男は今私の中に囚われている。何も出来ずただ私たちを見ているだけだ。それとこの機会に話しておくべきことがあるな。」
ヌルは肩を微かに揺らして笑う。真っ白い世界に存在する姿のためか、遠くから見ても動きが見えた。

「私はこの世界に侵入してから、世界の混乱の内にこの男を操り始めた。簡単な事さ、仲間に寄生させてそれを介してこいつ自身の行動を制御する。ただそれだけだ。こいつが生き残ったのは何故か分かるか。こいつが自分の周りに居る人間を全員殺したからだ。」
ヌルの予想外の言葉に鈴花は言葉を失う。そして、生まれてくる怒りに身を任せてヌルを睨み付けた。ヌルは彼女の視線を気にせず続ける。
「そういえば、この男は荒谷鈴花という人間を探していると言っていただろう。その女なら、私がこの男を操っている時に殺したよ。」
ヌルは先ほどの発言に上乗せするように鈴花に衝撃を与える。しかし、発言しているヌル自身は楽しそうだ。彼にとってはまるで楽しい遊びであるかのように見える。そして、彼は突然笑い出した。
「今私の中で君の知る宗太が暴れているよ。仕方ないだろう。自分が殺した人間を探していたんだからな。」
ヌルの笑いはなかなか止まらない。気持ち悪い笑いが白い世界に広がっていく。彼はしきりに叫べ泣き叫べと自分に言っている。つまり宗太に言っているのだろう。鈴花は彼の行為に、もう一人の自分の結末に体の中から言葉が溢れ出てきた。
「あんた、最低だよ。なんのためにこの世界の人を殺したのよ。」
鈴花の口から出てきたのはこれだけだった。まだ他にも言いたいのにもう出てこない。わめき散らしたい衝動を抑え込んだ結果かもしれない。
「君は別の世界の荒谷鈴花だろう。ならわかるはずだ。私は君のように別の世界の人間に創られてここに送り込まれた。この世界を破壊するためにね。」
ヌルはそこで笑いながら首を横に振る。自分は何をやっているんだということだろうか。笑い終えると、鈴花を見た。
「まあ、話はこれぐらいにして始めようか。」
ヌルは両手をいっぱいに広げる。すると、先ほどの敵によって白く染められた部分から物体が現れ始めた。それは木々の生長のよう

に伸びだし完全な姿となる。現れたのは様々な兵器だ。
「そして決めよう。どちらが本当の破壊者かを。」
ヌルの言葉で火器類の銃口が鈴花に向けられる。無数に聞こえる金属音。
鈴花が周囲を兵器で囲まれた今。最後の戦いが始まる。

第十六話　本当の破壊者

第十六話　本当の破壊者

周囲の火器類すべてが鈴花へ向けて弾を発射する。直後、彼女の眼前を半透明なものが覆う。前にも同じものに覆われたことがある。これは、ハルだ。

体に伝わる衝撃とともに体のまわりに無数の弾が食い込む。弾は鈴花の体には到達せず、すべてハルの体が受け止めた。止まらない攻撃。彼女はハルに包まれたまま移動を開始する。どこか、先の戦闘で白くなっていない場所に逃れたい。ヌルは彼女が走る間も容赦なく弾を撃つ。彼女は衝撃に耐えつつ走った。

鈴花は先の戦闘の時点で宗太はヌルに操られていたのだろうかと考える。それは宗太がブランクの一部を引き寄せて何処かへ行ってしまった為だ。それによって東京中が真っ白だろう。いや、範囲はもっと広いかもしれない。さてどうする、どうする。

鈴花はただ海の方向へ走った。特に深くは考えていない。ただ、ごちゃごちゃした町並みを走って探すよりは良いと思った。

そのとき、鈴花の背後で何かが爆発する。衝撃で前方に転がる。立ち上がりながら周囲を見ると、再び遠くから弾が飛んできた。

「私が何したって言うのよ。」

弾は地面に落下すると爆発音とともに地面をえぐる。破裂とともに直後周囲に広がる破片の混じった爆風。まともに当たったら体が無くなる。今は何も言わないハルが守っているから生きているというだけだ。鈴花はさらに走った。

「さあ、何をしているんだい。逃げてばかりじゃ楽しめないじゃないか。」

ヌルの気持ち悪い笑い声が背後から聞こえてくる。鈴花は声が近づけば近づくほど遠ざかろうと懸命に走った。

鈴花は息が荒くなりながらも、なんとか白くなっていない地域に入る。彼女が背後を見ればヌルは一人こちらを見ている。ヌルは彼女の居る地域に入ることなく自分の陣地に居座るようだ。彼女は適当な位置に倒れるように座り込む。すると周りを覆っていたハルは剥がれ落ち、いつの間にか消えてしまった。

「ハ、ハル。私にどうしろっていうのよ。」

鈴花はハルが居た場所を見て叫ぶも彼が帰ってくることは無い。仕方なく一人で戦うことにして本を開いた。すると、自動的にページがめくれる。何も書かれていないページが開き、その次のページが開いた。そこにはハルの姿がある。その絵が光りだし、絵の中から立体的な姿が浮かび上がってきた。ハルが再びこの世界に現れたのだ。

「ちょっとハル小さくない。」

本から出てきた三体目のハルは先ほどの彼の半分ほどしかない。これまでの大きさを見ると頼りなさが十分ある。小さなハルは自分の体を何度か見ると鈴花を見た。

「俺まで出るなんてどんだけ面倒な奴らなんだよ。」

ハルは大きくため息をつきつつ羽を羽ばたかせて飛び始めた。

「もう、最後の手段に出るしかないな。正直これはやりたくなかったんだけど。」

ハルは鈴花の前で彼女と向き合う。そして、そのまま前進してきた。彼女は何か怖くなって一歩後退する。さらに後退しようとしたときハルは彼女の体にくっ付いていた。彼女は真正面から胸にくっ付かれたためにびっくりして声を出す。ハルから離れようと体を振ったり手で払おうにも離れない。動きを止めたとき、ハルが彼女の体の中に吸い込まれていることに気がついた。

「嘘でしょ。」

ハルは完全に鈴花の体の中に入ってしまった。驚く彼女をさらに驚かせるように体の中から声が聞こえてくる。

『俺だ。別々の状態でやってたら何時までたっても勝てない。だっ

たら、一つになるだけさ。これで直接会話できる。本当は鈴花一人で飛んで欲しいが、急には無理だろうから俺が内側から操作する。お前は倒すことに専念しろ。』

鈴花は耳では無い体の内側から聞こえる声に気が狂いそうになったが、これまでのことを考えればまともでいられそうだ。

鈴花は黒い本を見る。ページがめくれて倒し方が書かれている部分へと移動した。問題は二次方程式の解を求めろということらしい。問題は全部で五問のようだ。問題数は何時もより少ないが、今回は少し変だ。まるで学校の試験問題のように問題と解答欄が一箇所になっている。

『ハル。これってどういうことなの』

鈴花は内に居るだろうハルに話しかける。

『もうこの世界の何処にも書くところが無いんだ。だから、本に直に書くしかない。こんな事言ってないで早く終わらせるぞ。敵がここまで来られないからって攻撃できないわけじゃないんだからな。』

ハルはそこで一瞬間を置いて『あ、来た。』と言う。

鈴花がすぐに周りを見ると弾が幾つも飛んできていた。すぐに今居る場所を離れて移動する。地面に落ちた弾、建物に当たった弾。どちらもこの世界を破壊しながら彼女を追い回す。走っていては疲れるしきりがない。彼女は立ち止まり、ハルに飛ぶように言う。すると、体が急に浮かび上がり、周りのビルよりも高く上昇した。

鈴花はハルに移動を任せる。ハルは自由に動き出した。幾つかの弾が飛んできたがすべて見事にかわす。一体型とはこれはこれで良さそうだ。ためしに彼女が目をつむっても大丈夫かと言えばハルは大丈夫だと応える。そういえば、どうやってハルは自分の位置と周りの障害物の位置を把握しているのだろうか。謎であるが、気にしてもきりが無いことだ。

「じゃあ、そろそろ始めましょうか。」

鈴花はチョークを持って、黒い本のページに触れる。ハルは敵陣へと向かって移動を始めた。彼女は慌てて止めようとするが、ハル

が黒い本を見ろと言う。よく見れば今回は敵の陣地内にて答えをすべて書き終わらせなければならないらしい。安全な場所で終わらせることができないということだろうか。
近づく敵陣。飛んでくる弾の数々。ハルの酔うような弾のかわし方。鈴花が酔わないのは状況のためだろうか。
「お帰り。あらら、本を見たままで私を倒せるのかな。」
ヌルの声が何処からか聞こえてくる。相手の陣地に入ったためかもしれない。鈴花はヌルが何処にいるかはわからず、ただ必死に二次方程式を解こうとした。因数分解はある程度の形は決まっているものの、どの形になるかがなかなか分からない。その点が厄介だ。
鈴花がそのような事を考えている間にも体のすぐ傍を熱い塊が通り過ぎていく。しかし、気にしていられない。彼女は黒い本のページ上でチョークを動かす。しかし、本にチョークなど合うはずも無い。それをハルに言うと、『指で書け。』と言われる。ためしに指で書いてみると、なぞった箇所がインクを垂らしたかのように染みている。チョークを左手に持つと右手の人差し指で書き始めた。一つの問題を解き終えれば自動的にページがめくれる。答えが間違っていればその場で再度解き直さなければいけないのかもしれない。
鈴花は二問目までの答えを書いたとき、ふと周りを見た。周りには重そうな火器類がある。しかし、こちらに向かって撃ってこない。ハルに聞けば弾の装填中だろうという事だ。今のうちに三問目を書く。そのうちに周りの火気類は再び動き出した。再び耳障りな爆発音とともに弾のかわし方で酔う。吐きそうになりながらも問題と答えを書いていく。指が磨り減るんじゃないかと思いながら三問目の答えを書き終えた。すると、四問目に入ったとき、これまでとは比べ物にならないほど移動が激しくなる。彼女は本から目を離して周囲を見てみた。すると、明らかに弾の数が増している。近い遠い関係なくすべての火器類から弾が飛んできているのかもしれない。
『早く終わらすんだよ。俺の体だって……。』
鈴花はハルの言葉を最後まで聞かずに再び書き始めた。しかし、

どう問題を見ても答えが分からない。解けないのだ。どうしたものだろう。どうしようかと思っていたら。ハルが話しかけてきた。

『二次方程式っていったら解の公式があるだろ。』

ハルの声で黒い本に式が表示される。ハルに説明されるとどこかで見たことがある程度であった。きちんと習っていないのかもしれない。そんな事を考えていると、ハルが怒鳴ってきたので早速解の公式を用いて解きだした。すると、不思議なことに簡単に解ける。その勢いのまま最後の問題まで解いた。解の公式さえ分かれば簡単な問題なのかもしれない。

鈴花は一度周りを見る。やはり、弾の数は変わらないが、もう手遅れだ。彼女が本を見ると、すべての数式が青白く光る。そして、すべてのすべきことが順に光ると最後にすべきことが浮かびあかがった。

「最後はヌルに叩きつけろと。そういうこと。」

鈴花は笑みを浮かべながら勢い良く黒い本を閉じる。事情を理解したハルはヌルを探し出す。いつの間にか弾は飛んでこなくなっていた。見つけたヌルはただじっとこちらを見ている。彼女たちは地面に降りるとヌルの前に立った。ヌルの体は震え、腰が少し引けているように見えた。そこで、彼女が小さく笑うと、ヌルは首を左右に何度も振った。何かを追っ払っているのだろうか。

「君たちは本当に強いね。うらやましいぐらいだ。その力を使えばこの世界も自由に扱える。どうだ、憎しみ合うのは止めて私と共に新しい世界を作らないか。」

鈴花は昔聞いたことのある台詞に自然と笑い出す。そして、ヌルを見た。

「その言葉、聞き飽きたわ。」

鈴花は黒い本を持ち直すと、ヌルに近づく。そして、本を思い切り叩きつけようとした。しかし、ヌルに当たる寸前で彼女の手から体へと衝撃が走る。彼女がヌルに本を押し込もうとするが一定以上近づかない。

鈴花はなんとか叩きつけようと本に力を加える。すると、突如ハルが彼女の体の中から出てきて、次に黒い本へと入っていった。黒い本が一瞬光ると、押し返されていた力が突然消える。彼女は加えていた力をそのまま本に託してヌルへ叩き付けた。頬にびんたをするように黒い本をぶつける。彼女は力を加えたために音がするかと考えたが、何も音はせず叩き付けた本はヌルの中へと消えていった。

鈴花は一歩後退して今後の展開を待つ。すると、ヌルは何も言わず地面に倒れた。直後ひどい揺れが彼女を襲う。しゃがみこみ周りを見れば世界が揺れているようである。

鈴花がヌルを見れば眠りから覚めたかのように目を擦っている。元に戻ったようだ。彼女が宗太に近づこうとしたとき。

「もう俺とお前の仕事は終りだ。帰るぞ。」

ハルは鈴花の手を持って引っ張り上げようとする。彼女はその手を振り解いて宗太に近づいた。

「宗太、ねえ宗太。」

宗太は鈴花の声が聞こえているのか、ゆっくりと目を開いた。そして、彼は彼女に手を差し出す。

「助けてくれて、ありがとう。」

ヌルは消えて元の宗太に戻ったようである。しかし、鈴花は彼にありがとうと言われる事なんてしていないと思った。彼女は必死に首を横に振る。

「違う、違うわ。私はただこの世界を破壊しただけよ。」

結局彼女が世界を破壊することですべて終わったのだ。ヌルが言った言葉が彼女の頭に響く。

『そして決めよう。どちらが本当の破壊者かを。』

本当の破壊者は鈴花だったのだ。彼女はうずくまり力の限り叫ぶ。彼女の言葉にならない声が世界に響く。彼女は大切なものを破壊した。それらはもう二度と戻らないのだ。

鈴花は叫び続けていると、ふと地面に足が付いていないように感じた。目を開ければ地面が遠くにある。

鈴花は辺りを見る。彼女を抱えているのはハルだ。すると、幾つもの黒く丸い円が上空に現れた。それはすべてのものを飲み込むには十分な大きさだった。
「ちょっと、待ってよハル。宗太も一緒に連れてってよ。このままじゃ危ないじゃないの。」
鈴花は暴れるが、今度はしっかりと掴んでいるためかハルから離れることは出来ない。彼女は無駄な抵抗を止めて地上にいる宗太を見る。彼も立ち上がり彼女を見る。
さらに鈴花の体が上昇する中で、彼女は宗太に手を伸ばす。決して届かなくても彼女は手を伸ばし続けた。

鈴花が次に気がついた時には、真っ白い世界に居た。何も無い真っ白い世界である。先ほどの世界とのつながりを示すのは彼女が着ている服だけである。
「目覚めたようだね。お疲れ様。」
白い世界のどこからか男の声が聞こえてくる。鈴花は辺りを見回す。それでもどこから聞こえてくるのかはわからない。その声は嫌に落ち着いていて気分が悪い。
「お疲れ様って何よ。此処から出してよ。宗太に会いたいのよ。」
鈴花は白い世界へと叫ぶ。どこに居るのかわからないならどこにでも聞こえるように大声で言うしかない。
「駄目だ。奴は感染者だ。助けることは出来ない。」
鈴花は体の力が抜けるとともに地面にひざと両手を付いた。感染者とは何か。ヌルも宗太を感染者と言っていた。
「感染者って何よ。宗太を早く助けて、お願いだから。」
彼女は白い空を見上げて懇願する。彼を見捨てることはできない。ただ、それだけだ。
「鈴花。君を選んだばかりに辛い思いをさせてしまったね。本当に済まない。」

瞬間鈴花の体の中を何かが突き抜けた。男の言葉。呼ばれた「鈴花」という名前。彼は何故彼女の名前を知っているのだろうか。彼女は頭の中で彼の声と言葉を繰り返す。この声を何処かで聞いたことがあるような気がした。

「この声を昔何処かで聞いたことある。けど、どこで聞いたのか思い出せないわ。ねえ、あなた誰なの。私とあなたはどこで会ったの。」

鈴花の中に疑問が膨らんでいく。その膨らみは際限を知らない。そのとき、ふとポケットに入っている写真を思い出した。写真を取り出して見る。そして、白い空を見た。

「まさか、私のお父さんじゃ、ないよね。」

鈴花がその言葉を言った後しばらく男は沈黙する。その沈黙が長引けば長引くほど彼が彼女の父親であるように思えた。彼女は再度彼に聞こうとする。しかし、それは彼の言葉によって遮られた。

「そうだ。君に黒い本を返そう。中を見ると良い。そこに宗太と言う男を助ける方法やお前の知りたい事が書いてある。」

男の言葉の後、鈴花の目の前に黒い本が現れる。ヌルに消えた黒い本である。彼女は宗太を助けるために黒い本に触れた。すると、手が触れた瞬間本が一瞬光る。彼女は嫌な予感がしたために手を離そうとした。しかし離れない。

「どういうことよ。手が離れない。嘘をついたのね。」

鈴花の手はまるで強力な接着剤で張り付いたようにまったく取れない。無理に取れば腕が壊れるんじゃないかと思うぐらいである。

「済まない、こうするしかなかった。君はこの世界に居てはいけない存在なんだ。それに、少々世界を知りすぎた。」

鈴花の体がゆっくりと光りだす。突如強烈な風が彼女に吹き、指先、頭から細かい粒が風にのって流され始める。彼女は自分の手を見る。その光景に現実を受け入れたく無いと首を横に振り顔を遠ざける。彼女の体が先端から良く分からない粒に変化して風に流されているのだ。良く見ればその粒は英数字の羅列のようだ。しかし、

それを知っても現状は変わらない。手、足の先と頭からゆっくりと体は粒に変化し風にのってどこかへ消えていく。
「なんで、なんでなのよ。お願い。お願いだから助けて。」
鈴花はただ白い空を見ながら叫んだ。そこに居るだろう男に向かって。
「さあ、帰るんだ。君の居るべき世界に。」
男の声が聞こえたとき、鈴花の両腕は流され両足が流され始めた。彼女は目の前で繰り広げられる現状に恐怖を覚える。ただただ彼女は痛みを感じず消えていく自分の体を見ながら、何も無い白い世界に向かって叫んだ。何も出来ない自分に、これから起こる何かに向かって。
そして、ついに鈴花は目の部分も流されてしまった。彼女はいよいよ何も見えなくなり忍び寄る恐怖に絶叫する。その声が聞こえなくなったとき、彼女は小さな光の粒となって何処かへ消えてしまった。

最終話　最後の破壊対象

最終話　最後の破壊対象

聴こえてくる目覚まし時計の音。鈴花は時計が鳴り始めるとゆっくりと目を開けて止めた。あくびをしながら起き上がる。彼女は半分寝た状態で身支度を済ませた。そして、鞄を持って一階にあるリビングへと移動する。リビングのテーブルには彼女の母親が作ったサンドイッチが載せてある。母親は既に仕事に行ったようだ。彼女は一人サンドイッチをかじった。

ふと鈴花はサンドイッチを口に含みながら時計を見る。するとと予鈴十分前だ。急いでサンドイッチを口に放り込み、皿を片付けて家を出た。そのまま早足で学校へ向かう。時間はあるが普通に歩いていたら間に合わない。学校に入ると昇降口にて素早く上履きに履き替える。そして、二階へ続く階段を上った。そこで、彼女は開かずの間と呼ばれる部屋を見る。何時もの通り鍵がかかっているだけだ何も変化は無い。彼女はそのまま教室へと入った。

「京子。おはよう。」

鈴花は先に来ていた京子に挨拶をしながら自分の席に鞄を置いた。そして、椅子に座ると京子のほうに体を向けた。

「ねえ、昨日テレビでやってた映画見た。」

京子は鈴花の言葉に頷く。二人は昨日放送した映画についてやれ主演の男がかっこいいとか、あの展開は無いだのと色々言い合う。

気がつけばチャイムが鳴り、ホームルームの時間が始まる。鈴花は未だ鞄から出していない教科書類を速やかに出して机へとしまった。

チャイムが鳴ってしばらくの後、先生が教室に入ってくる。

「ホームルームを始める前に一つ。今日から一緒に勉強する新しいお友達を紹介します。」

先生の発言は突然で、クラス内が騒がしくなる。男子はかわいい女の子だったら良いなとか、女子ならかっこいい男の子ならいいなとかである。

先生は彼らを静かにさせると、廊下のほうを見た。先生が教室の外に居るだろう転校生に入るよう促す。すると、ゆっくりと教室内へと入ってくる転校生。男子生徒だったためか、周りの女子がすかさず反応する。

先生は転校生が彼の横に立つと、自己紹介をするように言う。

「真部宗太です。今日からよろしくおねがいします。」

少々緊張気味の真部宗太。クラス全員の視線が集中しているためか無理も無い。すると、鈴花から見て彼の目が動いていることが分かった。クラス全員を見ているのだろうと思う。

鈴花は一度手元を見た後、再び真部宗太を見ると彼と目が合った。彼は小さく驚きすぐに視線を逸らした。彼女には彼が驚いた理由がわからない。

「それじゃあ、ホームルームを始めるぞ。じゃあ、真部君はあの席に座って。」

先生に言われて真部宗太は自分の席に向かって歩き出す。その時、鈴花の背後から京子の声が聞こえた。

「ねえ、今度来た転校生。鈴花を見て驚いてたね。まさか、知り合いとか。」

そこで京子は先生に注意されたために自分の席に引っ込んだ。

鈴花は再度転校生を見る。転校生、真部宗太。必死に過去に会った人と照合してみるも一致しない。

「それじゃあ、今日も頑張ろうな。」

先生は必要事項を伝え終わると教室を出て行く。

鈴花は一時限目の授業の教科書を取り出そうと机の中に手を入れる。すると、何か薄い紙が教科書の上に載っていた。取り出してみれば写真である。その写真を見て彼女は驚く。すぐに周りのクラスメイトがどうしたのかと聞いてくるが彼女は何でも無いと言った。

彼女はすぐに教科書類で写真を隠した。
写真に写っていたのは夜の公園でブランコに乗っている鈴花と転校生。そう、今日転校してきた真部宗太。
片手で頭を抱える鈴花。写真に写っているのは確かに彼女と今日来た真部宗太なのだ。しかし、何時誰が撮ったのか分からない。第一彼女は今日始めて彼を知ったのである。
そこで鈴花は軽く首を振る。いや、もしかすると彼女は彼を知っているのかもしれない。ただ、思い出せないだけなのかもしれない。
しかし、鈴花はどうやっても真部宗太との記憶を思い出せなかった。

大切なもの、何処かに忘れてきちゃったのかな。

Ｂｌａｃｋ　Ｂｏｏｋ　ｆｏｒ　Ｂｕｓｔｅｒｓ　完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8938h/

Black Book for Busters

2011年2月11日23時55分発行